『日本アジア研究』第12号（2015年3月）

日本におけるベトナム反戦運動史の一研究
――福岡・十の日デモの時代(2)――

市橋秀夫*

日本各地域に存在したベトナム戦争反対運動のなかでも，息の長い運動を続けたのが福岡市におけるベトナム反戦市民運動であった。その活動のベースとなったのが「十の日デモ」と呼ばれた定例デモで，1965年から1973年までの間のおよそ7年半，ほぼ休みなく月3回，市民によって続けられた 。

筆者は，福岡で「十の日デモ」が地道に奮闘していた1965年4月から1967年末までのおよそ3年間を「十の日デモの時代」と名付け，福岡での市民によるベトナム反戦運動の発足の経緯と運動の展開過程を明らかにすると同時に，このローカルな運動を全国的なベトナム反戦運動というより広い文脈の中において検討することを目的とした全3部構成の論考を準備した。本号掲載の論考は，その第2部にあたる。

本号では，はじめに，1960年代初頭から67年末までの福岡での既成組織によるベトナム反戦運動の動向を追う。福岡における闘争は，九州北部および沖縄がベトナム戦争の米軍戦略基地地帯となることへの反対というかたちで取り組まれた。ナイキ・ミサイルの配備，射爆場の存在，博多港での弾薬陸揚げ，小倉の山田弾薬庫の強化，そしてなによりも板付基地の活用強化に対する抗議運動が，福岡の既成組織が取り組んだベトナム反戦運動であった。また，既成組織による反戦運動の中でも，既成組織外の市民や，既成組織に所属しながら自主性のある活動を求める若者世代の意向に応えようとする運動形態の模索が試みられていることにも注目した。

続いて本号では，同時期の福岡の市民によるベトナム反戦運動の動向を検討した。既成組織による，あるいは既成組織を基盤にした反戦運動とは異なる特徴を持つ，「市民」中心のベトナム反戦運動が1960年代半ばの福岡には登場している。そうした「市民」は既成組織に所属しないままで，あるいは所属する既成組織を持ちながらも組織の運動とは別に，一個人として自主的に参加することができるベトナム反戦運動の実践に意義を認めて活動を展開しようとした。福岡の場合，そうした運動の場づくりに尽力したのは九州大学の知識人であった。とりわけ重要なのは，九大の数学者と，彼らが属していた学会である日本数学会の動向である。その点をみていく。

そして，本号の最後の節では，1965年10月に始まり，その後7年以上にわたって続けられたベトナム反戦デモを担うことになる「十の日デモの会」発足の経緯と担い手，その特徴について明らかにする。

キーワード：反戦運動，ベトナム戦争，福岡市，十の日デモ

* いちはし・ひでお，埼玉大学教養学部教授，歴史学

目次

0. はじめに
1. ベトナム侵略戦争に抗議する九大研究者たち　1965年4月
　1-1. 九大教授団，安保以来の抗議声明とデモ
　1-2. 青山道夫
　1-3. 具島兼三郎
　1-4. 都留大治郎
　1-5. 福岡安保問題懇話会
2. 全国各地でみられたベトナム侵略戦争反対の意思表示　1965年2月～1966年6月
　2-1. 全国各地で知識人たちが抗議声明
　2-2. 市民の自発的なベトナム反戦行動
　2-3. 政党や労働組合など既成組織によるベトナム反戦運動と日韓条約反対運動
　2-4. マス・メディアによって喚起された市民によるベトナム侵略反対
　2-5. ベトナム侵略反対と日韓条約反対――日韓条約反対運動の難しさ
　2-6. 自発性と個人性を求める流れ――ベ平連と反戦青年委員会
　2-7. 労働運動における反戦ストライキの困難
3. 小括
（以上，本誌11号に掲載）

4. 承前（1）
5. 福岡での既成組織によるベトナム反戦運動　1960年代初頭～1967年12月
　5-1. 福岡での反米軍基地運動
　5-2. 米国のアジア反共産主義軍事戦略と九州北部
　5-3. 改憲・核武装阻止福岡県会議
　5-4. 小林栄三郎
　5-5. 福岡県下米軍基地を通したベトナム戦争への加担への抗議
　5-6. 福岡県反戦青年委員会の結成
　5-7. 田川地区反戦青年委員会
　5-8. 日韓条約闘争後の福岡でのベトナム反戦運動
6. 数学者のベトナム反戦活動とその背景――若手数学者たちの戦後経験
　6-1. カリフォルニア大学「ベトナムの日委員会」に署名電報
　6-2. ベト数懇の発足
　6-3. 若き数学者たちの運動――東大SSS
　6-4. 九大数学教室の戦後
7. 九大十の日デモの会の発足　1965年10月～
　7-1. 直接のきっかけ
　7-2. 社会党を良くする会
　7-3. 渡辺毅，倉田令二朗
　7-4. 倉田ヒデ子
　7-5. 山田俊雄
　7-6. 金原ヒューマニズム
　7-7. 十の日デモの由来
　7-8. 東京ベ平連との関わり――意識していたが無関係
　7-9. 十の日デモは誰が参加して始まり，どのように行なわれていたか
　7-10. 十の日デモの特色
8. 小括（2）

（以下，本誌次号に掲載予定）
9. 承前（2）
10. 東京ベ平連との連携　1966年6月～
11. 労働者と学生の参加
12. 十の日デモの広がりとその評価
13. まとめにかえて

4. 承前(1)

本稿は, 福岡での市民によるベトナム反戦運動の発足の経緯と運動の展開過程を明らかにすることを主目的とする3部構成の論稿の第2部にあたる。論稿全体は，日本におけるベトナム反戦運動の初期段階にあたる1965年4月から1967年末までのおよそ3年間を対象とし，福岡における反戦運動を全国的なベトナム反戦運動というより広い文脈の中において検討するものである。

前号（11号）では，政党や労働組合といった組織によらない市民のベトナム戦争反対の動きが, 福岡市ではどのようなかたちで始まったのかを明らかにした。あわせて，その動きを起こした九州大学の中心的メンバーのバック・グラウンドを検討し, 福岡市における最初期のベトナム反戦市民運動の性格を論じた。

さらには, 福岡におけるベトナム反戦運動の特色を浮かび上がらせるにはそれを全国的な動きのなかに位置づけて検討することが必要であると考え, 前号の後半では，ベトナム反戦運動の全国的動向を整理し，政党や労働組合など既成組織の動向と市民の自発的な反戦運動の動向とを比較しながら，1965年2月の米軍による北爆以降, 日本の中でどのようにしてベトナム反戦運動が広まっていったのかを検討した。また，その際には，同時期に運動課題となった日韓条約反対闘争との関係，各種マス・メディアが世論や運動に与えた影響，ベトナム反戦運動において注目された自発性および個人性の問題, 労働運動が反戦運動に取り組む際に直面した問題などに注目した。それら個別の論点の検討とおして, 日本におけるベトナム反戦運動初期段階全般の特質を明らかにするよう努めた。

以上のような検討の結果, 日本では, 米軍の北爆が始まった1965年2月以降，同年6月頃までにはベトナム戦争に対する強い関心が喚起され，ベトナム戦争反対の世論が一定程度定着するようになっていたことが明らかとなった。本号では，それ以降のベトナム反戦運動の動向を，福岡での足跡を中心にして明らかにしていくこととする。

はじめに, 1960年代初頭から67年末までの福岡での既成組織によるベトナム反戦運動の動向を追う。この時期の九州北部一帯の米軍基地では，ベトナム戦争への米軍の介入の深化に伴う墜落事故や騒音被害がみられるようになり, 基地撤廃の声も高まっていった。64年8月以降には，原潜寄港などにみられるように，九州北部の米軍基地のベトナム戦争への関与は一段と強まっていく。そうした状況下，とりわけ65年2月の米軍による北爆以後，福岡県下の既成組織はさまざまな反戦のスケジュール闘争に取り組んだ。社会党・総評系では，地区反戦青年委員会の組織化もなされた。これは，既成組織による反戦運動の中でも，既成組織外の市民や，既成組織に所属しながら自主性のある活動を求める若者世代の意向に応えようとする運動形態の模索でもあった。そして，それらの闘争は, 九州北部および沖縄がベトナム戦争の米軍戦略基地地帯となることへの反対というかたちで取り組まれたといえる。ナイキ・ミサイルの配備，射爆場の存在，博多港での弾薬陸揚げ，小倉の山田弾薬庫の強化，そしてなによりも板付基地の活用強化に対する抗議運動が, 福岡の既成組織が取り組んだベトナム反戦運動であった。

次に，同時期における福岡の市民によるベトナム反戦運動の動向をみていく。1960年代半ばの福岡には，既成組織による，あるいは既成組織を基盤にした反戦運動とは異なる，市民派のベトナム反戦運動が顕在化した。九州大学のベトナム戦争反対を唱える知識人の中にも，共産党や社会党など既成組織とは一線を画した反戦の動きが，1965年夏ごろから次第にみられるようになっていく。そうした九大知識人の動きとの関連で最も重要なのは，九大数学者と，彼らが属していた学会である日本数学会の動向であった。

本号で最後に検討するのが，九大教官，とりわけ数学者を中心に1965年10月10日に始まり，その後7年以上にわたって続けられた「十の日デモの会」発足の経緯，担い手，その特徴である。

5. 福岡での既成組織によるベトナム反戦運動　1964年8月～1967年12月

はじめに，福岡での既成組織の動きをみていきたい。福岡県下における既成組織によるベトナム反戦運動は，地元北九州に直接結びついた米軍基地関連問題と密接にからむかたちで展開していったところにその特徴があった。福岡では，地元に存在する米軍基地撤廃という具体的な地域闘争の延長線上にベトナム反戦運動は位置づけられ，問題化されていったといえる。福岡でのベトナム反戦は，1950年代からの基地反対闘争の継承するかたちで展開されたのである。

5-1. 福岡での反米軍基地運動

福岡県内には，福岡市に位置する板付基地（現・福岡空港）をはじめとする軍事基地，射爆場，弾薬庫，通信基地，軍関係者住宅団地など米軍関連施設が多数存在していた。朝鮮戦争時には，福岡は朝鮮半島に展開する国連軍（米軍）の後方支援に大きな役割を果たした。

朝鮮戦争の休戦成立後，米軍が板付基地の拡張と機能強化に動いたため，1955年には「板付基地移転促進協議会」が発足，福岡市では官民全市をあげての福岡市板付基地撤去運動の取り組みが始まっている。板付基地は，福岡市の中心部からわずか3キロの距離に位置していた。

ところが，米軍の南ベトナムへの本格的介入が始まる1960年代初頭になると，保守系阿部源蔵市長のもと福岡市議会には板付基地の拡張を容認する姿勢がみられるようになり，市を挙げての基地移転運動というわけにはいかない状況が生まれた[1]。しかし，61年12月7日，米空軍F100 ジェット戦闘機が市内香椎の民家に墜落して母子を含む日本人4人が死亡したことや，62年初頭以降の米軍によるベトナム戦争介入本格化に伴って板付基地でB47やB52など水爆搭載可能爆撃機の発着が相次いだ中で，福岡市民の基地反対の声はふたたび高まりをみせるようになっていた[2]。そうしたなか，62年2月27日板付基地拡張に必要

---

[1] 日本社会党福岡県本部 35 年史編さん委員会編『日本社会党福岡県本部の 35 年』（日本社会党福岡県本部，非売品，1983 年），200 頁。61 年 8 月に佐藤政府は約 29 万㎡の板付基地の滑走路拡張を閣議決定したが，阿部市長は「安全施設の整備で拡張ではない」として容認した。

[2] 『読売新聞』東京版朝刊，1961 年 12 月 8 日，同夕刊，1961 年 12 月 10 日；日本社会党福岡県本部 35 年史編さん委員会編『日本社会党福岡県本部の 35 年』（日本社会党福

な市道変更議案が市議会で強行採決され，それに抗議する10万人集会が3月25日に東公園で開催された。

1963年に入ると，1月には乗務員の休養や水の補給のために原子力潜水艦日本寄港の申し入れが米側からなされ，また5月にはF105ジェット戦闘爆撃機75機を沖縄から板付基地に配備する計画を米第五空軍司令部が発表した[3]。すでに1月18日には，米軍ジェット戦闘機F100が板付空港民航用エプロン付近で空中爆発し，乗員一人が即死，機体の破片が300メートル四方に散らばり，搭載機銃弾が破裂した。これにより航空局保安事務所守衛室や日航西鉄案内所などの一部が損壊する事故が起こっていた[4]。F105ジェット爆撃機の配備が5月12日に強硬実施されると，革新系ばかりでなく，ふたたび福岡全市をあげての反対運動が展開されるようになった。

F100戦闘機の飛行騒音は在来機の2倍とも言われ，深夜も含めて一日に300回以上の離陸があり，エンジン整備も深夜を問わずなされていた[5]。福岡市民・県民の苦情はなによりもジェット機の騒音公害に向けられたものだったが，63年までには，福岡と佐世保（長崎県）が米軍のベトナム戦争遂行への後方支援機能を期待されていることもまた明らになっていた。

5-2. 米国のアジア反共産主義軍事戦略と九州北部

64年には，板付基地のほか，同年に日本政府が承認した米原子力潜水艦の佐世保港寄港問題，同じく64年に福岡県内に設置されたナイキ基地問題[6]，小倉の米軍山田弾薬庫や遠賀郡岡垣町の米軍射爆撃場問題など，九州北部がアジアにおける米の反共産主義軍事戦略にいっそう深く組み込まれていく過程がみてとれる。

原子力潜水艦の寄港については，64年8月28日に日本政府が受け入れ受諾を米政府に正式回答したことで反対運動が本格化した。「ベトナム戦争への準備であることは明らか」だとして総評はただちにアメリカ大使館に抗議を行ない，現地佐世保でも抗議集会が開かれた。佐世保での集会は社会党，共産党，地区労を主として構成された「原潜寄港反対佐世保地区統一委員会」によるもので，1,000名の参加があった[7]。しかし，社会党と総評は，原水禁運動の分裂から，安保共闘の再開や共産党との共同行動は行なわないとし，実際佐世保でも中央組織が主催する現地集会（西日本集会）は，共産党系が9月23日，社会党と総評系が9月27日と，別々に開催された。これに対し，福岡安保問題懇話会の学者・文化人は統一した原潜寄港阻止の闘いを訴え，総評傘下の全国金属労働組

岡県本部，非売品，1983 年），218 頁。

[3] 『朝日新聞』東京版朝刊，1963 年 1 月 24 日，同夕刊，1963 年 5 月 13 日。

[4] 同朝刊，1963 年 1 月 19 日。

[5] 同夕刊，1963 年 11 月 6 日。

[6] ナイキとは米軍のナイキ・エイジャックス地対空ミサイルのことで，日本の陸上自衛隊は，1962 年から 2 個大隊にこれを配備した。管轄は，1964 年から航空自衛隊に移管。核武装につながるミサイルとして，社会党などはその配備に反対した。

[7] 日本労働組合総評議会『総評二〇年史・下巻』（労働旬報社，1974 年），277 頁。

合福岡地本なども両集会に参加し，運動の統一と拡大に努力するよう組合員に指令を出した[8]。

しかし，日本政府は放射能測定など事前調査を10月末までに終え，原潜の受け入れ準備は着々と進められていった[9]。総評，社会党，中立労連などは，佐世保で西日本各県のオルグ常駐なども含めた積極的な寄港反対の現地闘争を展開したが，社共の統一行動は実現されないまま，64年11月12日には米原潜シードラゴンが佐世保に入港した[10]。これが日本への初めての米原潜寄港となった。福岡県下では，総評系の組合が時間外の一斉職場放棄抗議集会を行なったり，各地域で原潜阻止地区集会を開催した[11]。シードラゴンは65年2月2日に再び佐世保に入港，このときは社共の現地闘争本部の共催で西日本大集会が開かれた。「特定問題にかぎり現地の闘争本部が共闘（統一行動）を行う」という社共現地共闘が実現したのはこのときが初めてだったという[12]。以後5月25日にはスヌーク号が佐世保に入るなど，米原潜の佐世保寄港は繰り返し行なわれていくようになる。

ナイキ基地問題では，64年6月20日に政府が第二次ナイキ大隊の福岡設置案を公表し，11月には正式に，福岡の春日町の自衛隊西部航空方面隊司令部に指揮本部を置き，遠賀郡芦屋町，築上郡椎田町築城，久留米市高良台の各自衛隊基地に発射中隊を置くことが決定された[13]。これに対して，「改憲・核武装阻止福岡県会議」が，12月17日には県下一斉に「ナイキ基地反対県民の集い」を，翌65年1月23日には福岡で「ナイキ核武装阻止・平和と独立のための県民集会」を開いて抗議の意思表示をおこなっている[14]。

このように60年代前半，九州北部での米軍のプレゼンスが高まり，日本政府の米軍への協力体制が整備されていく中で，福岡におけるベトナム戦争反対運動は取り組まれていくことになる。北爆二ヶ月後の1965年4月18日，福岡では社会党県本部と福岡県労働組合評議会（福岡県評）が「改憲・核武装阻止福岡県会議」および「沖縄返還要求実行委員会」と協力し，市内の東公園で5万人を集めた集会「ベトナム侵略反対，日韓会談反対，ナイキ・原潜寄港阻止，沖縄返還要求，春闘総決起福岡県民大集会」を開いた。社会党の鵜崎多一県知事も出席した集会後，参加者はアメリカ領事館までデモを行なった[15]。

---

[8] 「金属福岡」no. 197，1964 年 10 月 5 日号，総評・全国金属福岡地方本部『「金属ふくおか」縮刷版 1 』（全国金属労働組合福岡地方本部，1976 年），182 頁所収。

[9] 『朝日新聞』東京版夕刊，1964 年 8 月 28 日；同東京版夕刊，1964 年 10 月 31 日。

[10] 自治労福岡県職員労働組合『福岡県職労四〇年史』（自治労福岡県職員労働組合，1990 年），424-25 頁；「金属ふくおか」no. 209，1965 年 1 月 20 日号，総評・全国金属福岡地方本部『「金属ふくおか」縮刷版 1 』（全国金属労働組合福岡地方本部，1976 年），188 頁所収。ちなみに，佐世保で社共の統一行動が実現したのは 1965 年 2 月 4 日のことだった。「金属ふくおか」no. 211，1965 年 2 月 15 日号，総評・全国金属福岡地方本部『「金属ふくおか」縮刷版 1 』（全国金属労働組合福岡地方本部，1976 年），191 頁。

[11] 『福岡県評二十年史』（福岡県労働組合評議会，1976 年），673 頁。

[12] 小山弘健・清水慎三編著『日本社会党史』（芳賀書店，1965 年），296-97 頁。

[13] 『朝日新聞』東京版朝刊，1964 年 6 月 21 日；同朝刊，1964 年 11 月 27 日。

[14] 自治労福岡県職員労働組合『福岡県職労四〇年史』（自治労福岡県職員労働組合，1990 年），425-26 頁。

[15] 日本社会党福岡県本部 35 年史編さん委員会編『日本社会党福岡県本部の 35 年』（日

5-3. 改憲・核武装阻止福岡県会議

前項でふれた「改憲・核武装阻止福岡県会議」とは，「安保共闘」の後継組織として県評（福岡県労働組合評議会）と社会党が64年7月9日に発足させたものだった。前身となった「安保共闘」（福岡県安保共闘会議）は総評，社会党，共産党など政治組織と，平和委員会や各種の友好協会など大衆団体によって構成されたものだったが，事務局は共産党が握り，原水爆禁止運動における社共分裂に伴って機能不全状態に陥っていた[16]。そうしたなか，改憲・核武装阻止福岡県会議が社会党系の組織によって結成されたのである。直接にはナイキ・ミサイルの福岡県内配備反対を契機として結成され，ベトナムや日韓条約，沖縄問題などに対応しようとしたものだった。学者や文化人も参加し，団体加盟と個人加盟の可能な組織で，設立時の会長は九大文学部教授（西洋史）の小林栄三郎であった[17]。社会党福岡県本部はこの組織を，より幅広く市民を結集して運動を展開するための中心組織として位置づけ，この組織を軸に70年安保改定にむけて自民党政治と対決する方針を持っていた[18]。つまり，「改憲・核武装阻止福岡県会議」は，幅広い文化人と市民層を巻き込む運動母体となるべく社会党と県評が立ち上げた幅広の反戦組織であった。

5-4. 小林栄三郎

初代会長をつとめた小林栄三郎は1908年生まれ（1985年没）の生粋の博多っ子で，1937年に九州大学法文学部に専任講師として採用されている。敗戦時，小林は次のようなやりとりをしたのを覚えていると記している。37歳の小林は，二等兵として内地の兵舎にいた。

> ある下士官が「これからが大事だ。銃剣の稽古をする」といいますので，私は「とんでもない。これからは学問と技術で敗戦のつぐないをするのですよ」と答えたのを覚えています[19]。

小林は，それまでの自分の研究は「歴史の現象」の面を追っかけるのに傾き，その「社会経済史的な掘り下げ」が欠けていたと反省したという。小林のドイツ労働運動史研究は，そうした地平から取り組まれていった。しかし上記の引用からもわかるように，小林は，現実の労働運動や社会運動へコミットメントして活動していくようなタイプではもともとなかった。たとえば，1951年のサ

本社会党福岡県本部，非売品，1983 年），234 頁。

[16] 同上，200，230頁；嶋崎譲「『安保共闘再開論』批判」『社会主義』168号（1965年10月号），20-28頁。福岡安保共闘会議については，衣笠哲生「六〇年安保闘争の福岡県での展開――県安保共闘の組織化過程を中心として」『法政研究』42巻2/3号，79-112頁を参照のこと。

[17] 『福岡県評二十年史』（福岡県労働組合評議会，1976 年），668-670 頁。

[18] 日本社会党福岡県本部 35 年史編さん委員会編『日本社会党福岡県本部の 35 年』（日本社会党福岡県本部，非売品，1983 年），259 頁。

[19] 小林栄三郎「人間を人間として尊重すること」小林栄三郎先生思い出文集刊行会編『厳しく　そして温かく』（小林栄三郎先生思い出文集刊行会，1986 年），111 頁（初出は『歴史評論』96 号，1958 年 5 月）。

ンフランシスコ平和条約・日米安全保障条約調印反対のとき，あるいは翌52年に破防法が国会に上程されたとき，西洋史専攻の学生たちは全員でデモに参加したが，小林は学生たちを呼んで「学問の基礎もロクロクできていないのに，ストやデモとは何事ぞ」と強く叱責したという[20]。

小林は，同僚でヨーロッパ中世史を専門としていた今来陸郎の示唆もあり，1956-57年頃からドイツの労働運動史の研究を深めていったという。そのなかで，基本的には学究肌であり教育者であった小林も，現代社会のアクチュアルな問題への関わりを持ち，発言を行うようになっていったようである[21]。小林は60年安保闘争時には，福岡安保問題懇話会のような文化人・学者の集った組織で活動したばかりでなく，学生の連日のデモ行進参加に対しても支持するようになっていた[22]。門下生で当時大学院生だった福田学は，そのときのことを次のように記している。

> 約一ヶ月間授業も殆ど休講でしたから，連日のように法文系校舎の玄関前に集合しデモ行進に行きました。小林先生も法学部の具島先生方と一緒にそうした学生を激励され，先生は学生へのあいさつに代えて自作の博多ニワカ（中味については発電所の四本（資本）の煙突が落ちだったことしか思い出せない）を披露されたのを覚えています[23]。

小林は，宴会だけでなく学内の政治集会でもこうした博多ニワカで社会批判を自演するというユーモアと雅のある人物でもあった。ともあれ小林は，62年に設立された「社会問題研究所」の初代所長を，64年には「改憲・核武装阻止福岡県会議」の初代会長を引き受け，福岡での反戦運動にも積極的に参加するようになっていた。社会問題研究所は「労働組合その他の民主団体の共同の研究機関であり，共同の教宣センター」であると設立趣意書には書かれている[24]。九大からは，奥田八二，川口武彦，島崎譲といった社会主義協会系の研究者が発起人に名を連ねていた。

小林はしかし，狭い意味での労働運動や政治運動に特化して関わっていったわけではなかった。より幅の広い社会運動や市民運動のほうにむしろ意義を認めていたように思われる。九大のベトナム反戦「十の日デモ」の常連となっていったのもそうした証左であろう。門下生のイギリス労働運動史研究の古賀秀男は，65～68年の助手時代，小林から「ヴェトナム反戦十の日デモにもしばしば誘われた」と振り返っている[25]。

---

[20] 小林栄三郎先生思い出文集刊行会編『厳しく　そして温かく』（小林栄三郎先生思い出文集刊行会，1986 年）に寄稿された加藤知弘「今はなつかしい叱られた話」（28 頁），栗林康孝「恩師栄三郎先生の思い出」（29 頁）を参照のこと。

[21] 古賀秀男氏からのメール（2014 年 11 月 18 日付）および電話でのインタビュー（2014 年 11 月 29 日）。

[22] 西島有厚「弔辞」小林栄三郎先生思い出文集刊行会編『厳しく　そして温かく』（小林栄三郎先生思い出文集刊行会，1986 年），94-95 頁を参照のこと。

[23] 福田学「九大西洋史研究室で学んだ抵抗の精神」同上，54 頁。

[24] 『社会問題月報』vol. 1, no. 1　（1962 年），表紙裏頁。

[25] 古賀秀男「小林先生のこと」小林栄三郎先生思い出文集刊行会編『厳しく　そして温かく』（小林栄三郎先生思い出文集刊行会，1986 年），35 頁。

九大の大学闘争時に助手を務めていた大畑勝は60年代末の大学紛争時を振り返り，小林について「先生は紛争解決に大活躍されるというタイプではなく，終始リベラリストとしての立場を貫かれた」と述懐している[26]。当時，西洋史研究室にも党派対立が持ち込まれるようになっていたが，小林は「なんでも認める」という構えで静観していたようである。小林は，リベラルな態度の持ち主ではあったが，古賀秀男が指摘するように，小林の政治性は，戦前リベラリストとしての青山道夫や，反ファシズムの具島兼三郎の政治性とは異なる質のものであった[27]。

前号で検討した「安保問題懇話会」と，ここまで述べてきた「改憲・核武装阻止福岡県会議」が，1960年代前半の福岡における市民派的要素を含んだ反戦運動の代表的存在であったといっていいだろう。本稿の後半で詳しく取り上げるが，1965年10月10日発足する福岡でのベトナム反戦市民運動「十の日デモの会」が，上記の運動経験や人脈との交流を持ちつつも，世代的にはより若い戦中・戦後世代，専門領域としては人文社会系ではなく自然科学系（数学）の九大知識人がその中核を担っていった点は，1960年代半ばから台頭する新しいベトナム反戦運動の特質を考えていくうえでも注目しておきたい点である。

5-5. 福岡県下米軍基地を通したベトナム戦争への加担への抗議

福岡県下の既成組織は，県下の米軍基地及びその関連施設が米のベトナム戦争体制に次第に深く組み込まれていく状況に，抗議の声を強め，実力行使も試みた。たとえば，1965年5月1日のメーデーには，門司港湾共闘がベトナム向け軍需物資荷役拒否闘争を行なったようである[28]。そして，上述した社会党県本部と改憲・核武装阻止福岡県会議は，65年夏の盛りの8月25日に「板付基地をベトナム戦略基地化しないための県民抗議集会」を緊急行動として組織している[29]。4,000名が動員されたこの大衆抗議集会は，台風逃避を口実に米極東空軍司令部が，原水爆の積載可能なB52長距離爆撃機を板付に移動させると7月27日に発表し，8月3日にはC130大型輸送機32機を板付基地に着陸させたことをうけたものだった。ベトナム戦争の激化および日韓条約締結といった全体状況に加え，弾薬の陸揚げのための博多港米軍専用使用の申し入れや，北九州小倉区の山田弾薬庫強化のための軍事道路の舗装，自衛隊ナイキ大隊の県内設置など，北九州地方内での具体的な動きが背景にあったが，地元板付基地に直接関わる問題ということで，既成組織の対応にも力が入った。社会党県本部書記ら3名の逮捕者を出したが，翌日から31日までの一週間にわたって毎日，150～200名が参加する座り込み抗議が続けられた[30]。

---

[26] 大畑勝「助手時代の思い出」同上，46-47 頁。

[27] 古賀秀男氏からのメール（2014 年 11 月 18 日付）および電話でのインタビュー（2014 年 11 月 29 日）。

[28] 『北九地評十五年史』（北九州地区労働組合評議会，1981 年），243-44，509 頁。この件に言及したほかの史料はいまのところ入手できておらず，詳細は不明なままである。

[29] 『朝日新聞』東京版朝刊，1965 年 8 月 26 日。

[30] 日本社会党福岡県本部 35 年史編さん委員会編『日本社会党福岡県本部の 35 年』（日本社会党福岡県本部，非売品，1983 年），242-43 頁。

65年9月9日には山田弾薬庫拡張反対北九州一万人集会が開催されたほか，9月10日には福岡県庁職員組合（県職）の遠賀療養所班が中心となって，福岡県岡垣町で同町米軍射爆撃場撤去集会が600名を集めて開かれている。県立療養所遠賀病院は1955年に設立されたベッド数300の公立病院であったが，62年には診療所から500メートルのところに米軍機が墜落していたし，65年8月30日には遠賀療養所勤務者の自宅庭先に米軍機の20ミリ機関砲の実弾が撃ち込まれる事件があった。遠賀診療所の一日休診集会（「射爆場撤去・政府の戦争政策反対」集会）はこれに対して県職組合員が中心となって起こした抗議行動であった[31]。県職が出したビラには次のようにベトナム戦争がとらえられていた。地元の米軍基地問題とベトナム戦争との関連が当時どのようにとらえられていたのかが，よくあらわれている文章なので以下に引用する。

> 私たち公務員は憲法に定められているように国民の奉仕者です。とくに福岡県庁の職員として住民のみなさんに直結して働いている私達は，常にみなさんの「くらし」とそして生命を守る義務を与えられています。
>
> 特に遠賀診療所はこのことと最も密接な職場の一つです。この職場の空で人殺しの演習がこれ以上続く限り安全は保障できません。
>
> ……
>
> 私たちはなにも好きこのんで一日休診などしたくはないのです。ことをあらだてたくはありません。
>
> しかしいつのまにか，ぐずぐずしておれない戦争の危機が目の前まで，せまってきているのです。
>
> ベトナム戦争の拡大にともなって，小倉山田弾薬庫からは次々積出しがおこなわれ，射爆場で訓練した兵士をベトナムに送りこんでいます。このままほおっておけば，薬きょうどころではなく，実弾，爆弾，原爆がいつ降ってくるかわかりません。
>
> まさかそんなことは起こるまいとのんきにかまえておれない危機がおしよせているのです。原子力潜水艦の入港した佐世保の市民は，はじめは無関係でしたが，最近次々とベトナム戦で疲れた兵が休養と称してやってくるにおよんで，はじめて戦争の不安を身にしみて感じ，アメリカが行っている戦争に日本がまきこまれないように，反対運動に立ちあがっています。
>
> 私たちは平和で安心して働ける日本であってほしいと願い，あえて戦争の危機に際し，岡垣射爆場の撤去の行動に遠賀診療所を一日休診してまでも，たち上がったのです[32]。

---

[31] 『福岡県職労四〇年史』（自治労福岡県職員労働組合，1990 年），426-28 頁。岡垣射爆場は 1946 年に米軍が設置。北九州市の西側に位置する岡垣町に位置していたが，「芦屋対地射爆撃場」という名称だった。芦屋町は隣町。日本に返還されたのは 1972 年，自衛隊からの返還はさらに 6 年後の 78 年である。

[32] 同上，427-28 頁。

これ以後も，米軍関連の事件や事故があるたびに，ベトナム戦争の拡大とそれに巻き込まれていくことへの不安が労働組合員も含めた福岡の人びとのあいだで大きく波紋を広げていくことになる。

5-6. 福岡県反戦青年委員会の結成

1965年9月22日，すべての青年・学生組織および個人を結集することを目ざした「福岡県反戦青年委員会」が旗揚げされている[33]。正式名称は「日韓条約批准阻止・ベトナム侵略反対福岡県青年共闘委員会」[34]。社会党と総評の呼びかけに応じ，県評青年協を中心に，県職青年部も積極的に参加し，福岡市婦人会館で70団体250名によって結成された。中央での反戦青年委員会の結成から20日ほど経って結成されたものであった。当初の運動方針は，以下の通りである。

①県下のあらゆる職場・地域で反戦決議，地域反戦青年委員会の組織化を行う
②4000万署名運動を支持し，1000万青年学生の署名とカンパ活動をすすめる
③討論集会・講演会・ニュースチラシの発行をはじめ教宣文化活動を強化する
④「改憲・核武装阻止福岡県会議」の中核となりうる青年組織に発展させる展望を明らかにしながら全国統一行動などに積極的に参加する

上記運動方針の④に明らかなように，福岡反戦青年委員会は，社会党・総評系の「改憲・核武装阻止福岡県会議」の中核となる青年組織としての活動を期待されていた。はっきり言えば，福岡の「反戦青年委員会は，改憲阻止会議の方針で組織される一組織としての性格を持っている」ものと位置づけられていた。また，反戦青年委員会は青年運動の統一戦線の役割を果たすべきものだから「反戦・平和の闘いに参加を希望する青年が自由に加入できる組織」でなければならない。つまり，原則としては「個人加盟」で組織されなければならないのだが，活動家層が薄いという「福岡県の現状」から，個人加盟だけでは少数精鋭主義の非大衆的組織に陥る危険性があるとして，したがって当面は組織加盟と個人加盟の併合方式で進めていくべきだともされていた。

5-7. 田川地区反戦青年委員会

ここで，一事例として，筑豊地区における田川反戦青年委員会をとりあげ，福岡県下の地域反戦青年委員会がどのような経緯で形成されていったのかを具体的にみてみたい[35]。田川における青年層の横の交流が始まったのは，1965

---

[33] 『福岡県評二十年史』（福岡県労働組合評議会，1976 年），701 頁。
[34] なお，自治労福岡県職員労働組合『福岡県職労四〇年史』（自治労福岡県職員労働組合，1990 年），428-30 頁では，正式名称は「日韓条約批准阻止・ベトナム侵略反対福岡県青年共闘会議」とされている。
[35] ここでの田川の事例は，熊谷恒夫「反戦委員会をどう強化するか――福岡での経験から――」『社会問題月報』vol. 6，no. 10（1967 年），9-13 頁の報告に依拠したもので，

年に福岡県青年学生平和友好祭の筑豊ブロック祭典を担った実行委員会の活動経験からだった。組合の枠を超えた青年同士の交友が生れ，「皆んな［原文ママ］の考えが自由にだせる集まりが欲しい」ということで田川地区青年連絡協議会（青連協）が半年間の組織化を経て結成された。その中で確認されたことのひとつに，以下の点があったという。

> 田川地区の単組青年部長を呼びあつめて動員指令を消化するだけで，本当の青年運動が作られるか。現実には青年は動員にいや気がさしている。普通の青年労働者は，これまでありきたりの「運動」（動員，演説，大会，カンパ）にあきあきしている。そのために今日おかれている青年の現状を打ち破り，青年の生き生きとした力がおのずとあふれ出る組織，青年みずからがひとりひとり行動に対して納得したうえで積極的に参加できる組織，どんな意見でも自由に述べられるなんの偏見もなしに討議が保障される組織でなければならない。だから青年の組織は，他のどのような組織にも従属することなく，自主的判断で自由に決議しかつ実行される組織でなければならない。

こうして青連協は発足し，「学習会，春闘拠点運動，平和友好祭，原水禁運動，レクレーション」などに取り組みながら地域青年活動家の結集を進めていった。ちょうどその時期に，地域反戦青年委員会の組織化が求められ，青連協が主導して田川地区反戦青年委員会を「組織として定着させていった」という。

この地区青年委員会が自分たちの活動として最も熱心に取り組んだのは，政治運動でも社会運動でもなく，文化運動だった。新制作座の「青春」公演を引き受けたのである。目標とした600枚の倍以上となるチケット販売などを通して地域に青年委員会の名を広め，そこから総選挙・統一地方選の取り組みや国労の反合理化闘争を「最も戦闘的に闘う部隊をも作り出した」と評価されていた。こうして福岡県下では，1967年秋までには福岡，北九州，京築，田川，嘉飯，直鞍，八女，大牟田など主要地区で反戦委員会が組織され，政治から文化までの地域におけるあらゆる運動を担うようになっていた。

そのようにすそ野を拡げていった福岡反戦青年員会であるが，65年の結成当初の最初の大きな仕事は10月10日，改憲・核武装阻止福岡県会議との共催というかたちで1万人が参加した「ベトナム侵略反対，日韓条約批准阻止10･10県民大集会」の開催であった[36]。佐藤首相の張りぼて人形が福岡市東公園の会場中央で「火あぶりの刑に処され」，集会後はアメリカ文化センターへ向けた市中デモが行なわれた[37]。

11月6日の衆議院日韓特別委員会と11月12日の衆議院で日韓条約案件が強行可決された際には，立て続けに抗議行動が行なわれている。11月9日には県内の8地区で日韓条約反対の集会が開かれ，計1万5,300人が参加し[38]，11月13日には社会党と共産党の一日共闘による強行採決に抗議する統一大会が5万1千人

引用もそこからなされている。

[36] 『福岡県職労四〇年史』（自治労福岡県職員労働組合，1990 年），429 頁。

[37] 『福岡県評二十年史』（福岡県労働組合評議会，1976 年），701-702 頁を参照のこと。

[38] 同上，1127 頁。

を集めて福岡東公園で開催された[39]。社会党県本部はさらに，11月21日～12月12日まで，ベトナム反戦・日韓条約反対の4,000万署名活動を展開した[40]。この署名およびカンパ活動では，福岡県評は全国一の成績をあげたとされている[41]。

5-8. 日韓条約闘争後の福岡でのベトナム反戦運動

田川の地区反戦青年委員会の事例でみたように，地域における青年主体の日常活動はさまざまに展開されていたようだが，日韓条約反対闘争終結後の66～67年のあいだは，福岡での反戦青年委員会によるベトナム反戦闘争にみるべきものは見当たらない。スケジュール闘争に埋没するばかりで，独自の自発的な動きを生み出さすことはなかったようである。

ここでは，67年末までの2年間の間に既成組織によって取り組まれた福岡での反戦集会やデモを概観しておきたい。

社会党福岡県本部は66年2月7日，九電体育館で800名の活動家を対象に成田書記長を迎えて「ベトナム侵略戦争粉砕団結集会」を開催し，4月20日には板付基地現地調査を行ない，基地内北側の県道の廃道化に反対してアメリカ領事に対する抗議行動も実施した[42]。7月3日には社共共催で「ハノイ爆撃に抗議する福岡県大集会」が5,000人を集めて東公園で開催され，7月9日には板付基地撤去の西日本集会が取り組まれた[43]。

秋には，10月14日に社・共・県評がベトナム反戦一日共闘を実施し，県下14か所で4万人が動員された。これに続く第三次統一行動として，一週間後には，ベトナム反戦，最賃制確立，公務員賃金引上げ，炭鉱合理化反対の4本柱で，福岡でも10・21統一ストライキが行なわれた。これは10・21統一反戦ストと呼ばれたが，福岡においても反戦ストライキの実施は容易ではなかった。全電通福岡支部では，ベトナム戦争には反対であるが実害処分まで割り切って反戦ストライキに参加することはできないという「スッキリしない状態」が組合員の間に根強くみられた[44]。福岡高教組は，人事院勧告の完全実施という賃金闘争を重点目標とすることでスト実施となったが，「ベトナム反戦の闘いとの結合が十分でなかった」し，地域や父母からも十分な支持を得られなかった点を反省点として挙げざるを得なかった[45]。自治労福岡県職も組合討議を経て組合員78％の賛成投票を得て早朝1時間の時限ストに臨んだが，「政治ストは違法」という壁は乗り越えることができなかったことを第一の反省点に挙げていた[46]。

---

[39] 同上。

[40] 日本社会党福岡県本部 35 年史編さん委員会編『日本社会党福岡県本部の 35 年』（日本社会党福岡県本部，非売品，1983 年），245 頁。

[41] 『福岡県評二十年史』（福岡県労働組合評議会，1976 年），701 頁の署名・カンパ集計表を参照のこと。

[42] 日本社会党福岡県本部 35 年史編さん委員会編『日本社会党福岡県本部の 35 年』（日本社会党福岡県本部，非売品，1983 年），259 頁。

[43] 同上，514 頁。

[44] 西本僥（全電通福岡支部）「職場に根づいた反戦思想」『社会問題月報』vol. 6, no. 1(1967 年)，30 頁。

[45] 佐々木清隆（福岡県高教組久留米支部）「権力との闘いだった 10・21 スト」『社会問題月報』vol. 6, no. 1 (1967)，31-34 頁。

[46] 吉岡茂「一人ひとりがストに突入」『社会問題月報』vol. 6, no. 1 (1967)，34-36 頁。

正面からベトナム反戦を掲げて闘争に入ることができたのは国労ぐらいであったという[47]。

67年においても，スケジュール的なベトナム反戦行動以外に，既成組織が何か新しく取り組み得たということはなかったように思われる。66年のときと同じ7月9日，社会党と総評はベトナム侵略反対と沖縄返還要求を重ねた集会を，全国を二分して東京・砂川と福岡・板付で開催した。原子力空母エンタープライズの日本寄港の可能性が強まったことを受け，福岡・板付集会の名称は「ベトナム侵略反対，原子力艦隊寄港阻止，沖縄返還要求，軍事基地撤去，西日本集会」とされた。台風崩れの天候の下，東公園に関西以西21県の代表2万7,000人が参加した。板付基地までバス200台でパレードデモが行なわれている[48]。そして秋には，やはり前年同様に，10・21ベトナム反戦国際統一デーが福岡県下30か所で各地区労を中心に社共三者共闘というかたちで行なわれた。3万5千人が参加したといわれている[49]。東京では，10月8日に佐藤首相のベトナム訪問阻止のための羽田闘争が反日共系全学連によって行なわれ，京大生一名が死亡して全国の学生に大きな衝撃を与えていたが，福岡では学生にせよ反戦委員会にせよ目立った抗議行動は取り組まれていない。

以上みてきたように，米軍による北爆以後，福岡ではさまざまなスケジュール闘争が取り組まれた。主要地区には地区反戦青年委員会も組織されて横のつながりを持った青年労働者の地域活動が展開されていたようだが，ベトナム反戦運動となると，既成組織のスケジュール闘争に参加する以外に目立った運動はなされていなかった。また，既成組織が取り組んだのは，ベトナム戦争それ自体にストレートに反対するというかたちでの反戦運動ではなかった。福岡におけるベトナム反戦・日韓条約反対の運動は，九州北部および沖縄がベトナム戦争や朝鮮半島有事の際の米軍戦略基地地帯となることへの反対というかたちで取り組まれたのである。射爆場などでの米兵訓練，各種戦闘機の発着地，弾薬などの武器庫，米兵の休息や燃料の補給地など，ベトナム戦争を支えるさまざまな兵站機能が福岡や佐世保には求められ，実施されていた。それらは，福岡の人びとにとって具体的に目に見える脅威であり恐怖であった。佐世保への原潜寄港，ナイキ・ミサイルの配備，射爆場の存在，博多港での弾薬陸揚げ，小倉の山田弾薬庫の強化，そしてなによりも板付基地の活用強化への抗議と反対運動が，福岡の既成組織が取り組んだベトナム反戦運動であった。

6. 数学者たちのベトナム反戦活動とその背景
——若手数学者たちの戦後経験——

宮地真作（自治労・福岡県本部委員長）「県本部はいかにたたかったか＜その３＞―地方労共闘の権利闘争と結合」『自治労調査時報』286･7 合併号（1966 年 12 月），12-18 頁の詳細な経過報告も参照のこと。

[47] はっちょう・かずお「反戦の壁と賃闘の壁」『社会問題月報』vol. 6, no. 1 (1967)，23 頁。

[48] 日本社会党福岡県本部 35 年史編さん委員会編『日本社会党福岡県本部の 35 年』（日本社会党福岡県本部，非売品，1983 年），279-80 頁。

[49] 『福岡県評二十年史』（福岡県労働組合評議会，1976 年），767 頁。

以上みてきたように，福岡での既成組織によるベトナム反戦運動は，米軍の基地，軍港，弾薬庫，射爆場，そして自衛隊基地という米日の軍事基地システムの構成要素に対する反対運動として既成組織を中心にして組織されていた。1965年前半の福岡では，東京や京都や神戸に見られたような市民による「セルフ・スターティング」でベトナム反戦行動が行なわれた形跡はないし，学生たちの独自の動きもなかった。そんな中で意思表示をしたのは，前号で確認したように，九大を中心とした大学知識人であった。しかし，その九大研究者有志を中心とした65年4月の集会とデモにしても，一回限りのものであった。そして，そのときの中心となったのは，福岡安保問題懇話会の活動に精力的に参画していた青山道夫や具島兼三郎といった九大の社会科学系教官たちであった。つまり，それは，安保問題懇話会の60年安保をめぐる運動経験を直接に引き継いだ活動であり，60年安保世代とその人脈の中で実現したものだといっていいだろう。

この65年4月から6月は，ベトナム反戦の意思表示が日本各地で最初の大きな高揚をみせた時期だった。その頂点となったのが，すでに触れた6月9日東京で開かれたいわゆる「一日共闘」であった。しかし，福岡では，そのようなベトナム反戦気運の盛上りは見られなかった。「その後戦争はますます苛烈になっていったが，福岡市では，こういった市民運動はしばらく何もなかった」[50]のである。大学は夏休みに入り，九大教官の動きが再び活発になるのは9月に入って新学期を迎えるあたりからである。

しかし，65年4月のベトナム反戦デモに熱心に参加した九大の教官たちは誰もが何もしていなかったわけではなく，小野山卓爾（1924-2011）によれば，それぞれが所属する学会などで反戦運動を進めていたという。その中でも福岡のその後のベトナム反戦運動との関連で最も重要なのは，日本数学会に所属する九大数学者の動きであった。福岡での持続的な反戦市民運動を起こしていくイニシアティヴをとったのは，工学部応用理学教室に属する教員を中心にした九大の数学者たちだったのである。数学者によるそうしたベトナム反戦運動がどのように始まったのかを，次に見ていきたい。

6-1. カリフォルニア大学「ベトナムの日委員会」に署名電報

65年5月の数学会春季年会の際，偏微分方程式シンポジウムが京都・堅田で開催され，フィールズ賞を受賞したパリ大学の数学者で社会主義者のシュワルツ（Laurent-Moïse Schwartz, 1915-2002）ら，海外の数学者数名が講演を行なった[51]。日本での数学者によるベトナム反戦運動の中心的存在としてのちに活躍することになる福富節男によれば，このとき数学者仲間の斎藤正彦と木下素夫とともに，シュワルツに会ったという。そのときの懇談では，「カリフォルニアのスメールのベトナム反戦運動を支援しようというのがシュワルツの趣旨であった」[52]。「スメール」とは，カリフォルニア大学のベトナム反戦組織「ベ

---

[50] 小野山卓爾「『十の日デモ』の意識」『現代の眼』，1967 年 3 月号，67 頁。

[51] 『数学』17 巻 3 号（1965），1 頁。シュワルツの講演記録は，『数学』17 巻 4 号（1966），1-12 頁に掲載されている。

[52] 福富節男「日大時代，そして大学闘争」『木下素夫を偲ぶ』（木下素夫追悼文集刊行会，1989 年），102 頁。

トナムの日委員会Vietnam Day Committee」の組織者の一人で，1966年にフィールズ賞を受賞することになる世界的に著名な幾何学者S・スメイル（Stephen Smale, 1930-）である[53]。ベトナム反戦運動への関与からスメイルがカリフォルニア大学を首になりかけているという話をシュワルツはしたらしい[54]。

詳細はなお不明なところがあるが，はっきりしているのは，スメイルの所属するカリフォルニア大学バークレー校において5月21日，36時間におよぶティーチ・インが「ベトナムの日委員会」によって実施されようとしていたことと，これを知った日本の数学者たちが，学会開催期間の19日夕方から20日の正午にかけて急遽署名を集め，20日の午後にスメイル宛に激励電報を打ったということである。打電の時までに143名の署名が集まっていた[55]。

すると，スメイル教授からは礼状とともにベトナムの日委員会のニュースが送られてきた。このニュースはその全文が岩波書店刊行の総合雑誌『世界』1965年10月号（発売はおそらく9月初旬）に翻訳掲載され，広く知られることになった。

6-2. ベト数懇の発足

これに並行して9月18日，関西の数学者有志が集まってベトナム戦争反対について話し合いが持たれている。そして，そこに出席した数学者が発起人となって，10月17日，東京教育大学で開かれた日本数学会秋季総合分科会の際に，第1回の「ベトナム問題に関する数学者の懇談会」が開かれた。「ベト数懇」と呼ばれることになるこの最初の集まりには，74名の数学者が参加した。午後4時半から1時間ベトナム情勢に関する講演を聞き，その後9時までベトナム戦争反対運動の進め方に関して討論し，国内外での反戦諸活動を進めること，そのために全国的な連絡組織を作ることが確認され，声明文も作成された[56]。

---

[53] Joe Freeman, *At Berkeley in the Sixties: the Education of an Activist, 1961-65*, Bloomington, 2004, p. 257. この集会に参加した著者フリーマンによれば，のべ 30, 000 人が参加し，ピーク時の参加者数は 12, 000 人達したという。

[54] 渡辺毅オーラル・ヒストリー，2012 年 9 月 14 日。山田俊雄もまた，シュワルツと日本のおもに東京在住の数学者たちが座談会を開いてベトナム戦争について意見交換した話を聞いたという（山田俊雄オーラル・ヒストリー，2008 年 2 月 27 日）。倉田令二朗は， 65 年「五月の数学会の時に，そのスメール教授から日本の数学者宛に，ベトナムにおける VDC（ベトナム・デイ・コミティ）の活動に賛意を表してくれ，という呼びかけ」があった（鶴見俊輔・小田実・開高健編『反戦の論理』（河出書房，1967 年），218 頁）としている。

[55] 「カリフォルニア大学スメイル教授へのメッセージ」（1965 年 7 月，数学者たちによる署名運動，吉川勇一史料）。65 年 7 月までの段階でこの署名活動に名を連ねていた九大の数学者は以下の 17 名。有川筋夫，石川暢洋，上野清太郎，押川元重，小野山卓爾，大和田広元，金原誠，倉田令二朗，小島順，児玉哲夫，坂本武司，瀬口常民，田中洋，十時東生，向井純夫，室谷義昭，山田俊雄。この最初の時点でほかに九州で署名していたのは，鹿児島大学の横田正夫と熊本大学の佐藤昭一の 2 名だけであった。また，全国的に見た署名者数も，九州大学所属教員は京都大学（20 名）に次いで 2 番目に多かった。なお，福富は「183 名の名で，スメイル教授の反戦活動を支持することを伝えた」と回想している。福富節男「日本における数学と戦争」『現代数学』2015 年 1 月号，4 頁。

[56] 「―特集―ベトナム反戦運動の記録」『数学の歩み』11 巻 4 号（1996 年），41-43 頁。

連絡センターが設置されたのは当初，関東，中部，関西，九州の4地域であった。九州の連絡先は，九州大学工学部応用理学教室であり，代表者には金原誠と小島順の2名が名を連ねている。また，第1回ベト数懇以後の九州では「九州ベトナム問題数学者懇談会が発足し，積極的な活動が行われています」とも報告されていた[57]。

次節で詳述するが，福岡では10月10日，教官有志によるベトナム反戦定例デモ，通称「十の日デモ」が始まっていた。九州ベト数懇に参加した数学者たちは，この十の日デモに積極的に参加しようと話合っていた。また，第1回ベト数懇が出した声明に賛同する人を募ると同時に，英訳された声明文を海外の知人に送ったりもしている[58]。

ベト数懇に集う数学者たちは，その後も活発なベトナム反戦運動を続けていった。翌年66年5月の第2回ベト数懇開催のあと，参加した日本の数学者たちは世界の数学者による国際集会の開催を呼びかけ，その結果として，同年8月のモスクワにおける国際数学者会議では約40名の世界各地の数学者有志による反戦集会が開かれた。この国際集会への対応は九州が担当し，国際集会開催に向けたアピール文は九大で仏訳されて，世界の数学者に発信されている。そして，モスクワのベトナム反戦集会を機に，シュワルツらが中心となった声明が作成され，世界各国の数学者のベトナム反戦署名活動へと展開していった。これに向けた署名活動に日本国内でも取り組むことになったが，その国際署名活動の呼びかけ人15名には，九大の金原誠と倉田令二朗が名を連ねていた[59]。

66年10月の日本数学会の年大会の際にも，日本の数学者有志はベトナム戦争反対の集会を行ない，声明を出し，約200名で街頭行進まで行なっている。その後も精力的に日本国内で反戦署名活動を実施し，大学に所属する数学者の80%，日本数学会の日本人会員全体の50%が名を連ねた総数3,654筆に達する署名を1967年5月までに集めた。この署名簿は，ベトナムでの軍事行動の即時停止と軍隊の撤収を求める抗議文とともに，アメリカ大使館においては一等書記官に，また首相官邸では官房副長官に手渡されている[60]。福岡には，仙台，東京，松本，京都，名古屋とともに署名活動実行委員が置かれていたが，署名活動終了後もベト数懇に集う数学者の反戦活動連絡センターとして位置づけられていた[61]。

ベト数懇に集った数学者たちは，狭い政治的セクト主義にとらわれることなく，幅広く反戦の統一戦線を組むのに成功していた。マルクス主義的な歴史法則や社会構造の原理主義的な理解の違いがそのまま運動に持ち込まれてセク

---

[57] 同上，42 頁。

[58] 同上，43 頁。

[59] モスクワでの国際集会及び世界的署名運動の経緯については，『数学の歩み』12 巻 1 号（1966 年）88-94 頁。仏訳はおそらく金原誠が担ったものと思われる。

[60] この段落のベト数懇の活動に関する記述と引用は以下による。「数学者によるベトナム戦争反対の国際的署名活動」の丸山儀四郎と本尾実による 1966 年 12 月 1 日記のあとがき（発行日不明，ベ平連発行文書，吉川勇一史料）；福富節夫・小針晄宏「数学者によるベトナム戦争反対の声明と署名」（1967 年 5 月，数学者による署名運動，吉川勇一史料）；『朝日新聞』東京版夕刊，1966 年 2 月 7 日。

[61] 福富節夫・小針晄宏「数学者によるベトナム戦争反対の声明と署名」（1967 年 5 月，数学者による署名運動，吉川勇一史料）。

ト的な対立に陥りがちだった社会科学系世界ではみられないものだったといえるだろう。その特徴は，たとえば，数学者の国内署名集めの中心だった京都大学教養部数学教室の教官小針晛宏の次のような文章に良くあらわれている。小針は，祇園の舞妓さんの語り口を借りて，ベト数懇が65年10月以降に国内で取り組んだベトナム反戦署名集めの顛末を，次のように記していた。

> ひと昔まえやったら，こんな署名活動したかて，数学会は政治とは一切関係ない，と言わはるボスはんのムードに遠慮して「気持ちはわかるけど，署名はかんにんしてえな」言うて逃げなはるお人が多かったやろけど，或はひどいときには，「あいつは数学が三流やさかい，政治運動やりよる」というようなとんでもない中傷を受けたかも知れまへんけど，［署名した］数学会員が1,044人，学会にまだ入ってはらへん大学院のお人やら寄せたら，大学・会社・研究所関係1,436人，いう数字……数学会員が約2,200人ですさかいに，こら相当なもんどすえ。今度から，ベトナム反戦に署名しとかなんだら，なんぼえらいボスはんでも，学会の理事にも評議員にも落選してしまう，いうようになったらさぞ気持ちが……ヤッパリやめとこ，アワヽヽワ[62]。

6-3. 若き数学者たちの運動——東大SSS

以上のような経緯でベト数懇は発足したが，そもそも，数学者という純粋科学の学究たちの少なからぬ部分が，なぜかくも熱心にベトナム反戦運動に取り組んだのだろうか。ベト数懇の中心的担い手の一人であった福富節男は，自ら次のように数学者の反戦運動の特色をまとめている。

> 数学者は研究・教育の機会を共にすることが多く，ある種のコミュニティをなしていることが活動を続けることのできた原因である。つまり物理空間としての地域ではなく，mental（ものの考え方）あるいは職業的近親性というものによって数学者の集まりを精神的地域とした地域運動であるとも考えられた。したがって数学者の反戦運動は市民運動の一つであり，数学が戦争にどう係わっているのかについて積極的な議論はほとんどしなかった。戦争と数学の関係についての自覚は未熟であったといえよう[63]。

末尾の部分を書きながら福留が念頭においているのは，日本人数学者が第二次世界大戦下において，暗号解読について行なった戦争協力の研究のことである。福富によれば，第二次世界大戦下，解読されない暗号作成の数学的研究のために，1944年4月3日，東京大学，東北大学，大阪大学の数学者が参加する「陸軍数学研究会」が設立された。そして戦後，そうした戦争協力を行なった日本

---

[62] 小針晛宏「ユエとサイゴン」『数学の歩み』12 巻 2 号（1967 年），94 頁。

[63] 福富節男「日本に於ける数学と戦争」『現代数学』2015 年 1 月号，4-5 頁。なお，この文献を見つけ，その重要性を教示してくださったのは平嶋康昌氏である。記して感謝いたします。

人数学者の中で公の場において自己批判を行なったのは，東京大学側の実務の中心を担った彌永昌吉ただ一人である，と福富節男は記している[64]。陸軍参謀本部に応召されていた福富自身も，協力者の一人であった。

戦後世代の若い数学者は以上のような戦争協力の事実をほとんど知らなかったのではないかと思われるが，1919年生まれの福富以前の世代の数学者には，戦争協力の経験への反省が，それぞれのベトナム反戦運動への傾倒の背景にあったと言えるかもしれない。

しかし，戦争協力への個々人の反省や数学者特有の強い「職業的近親性」以上に，押さえておくべき日本人数学者の戦後の歴史があるように思われる。それは，戦争協力への反省と密接に関係する側面がありながらも，戦後世代の新しい数学徒の欲求の表現でもあった，戦後日本における数学界の民主化運動の動きである。以下，その点をみておきたい。

戦後1940年代末から50年代初頭，日本全国の旧制高等学校および新制大学に学んでいた若き数学者たちは，研究環境に対するさまざまな不満を抱えていた。なかでも東大では，旧制第一高等出身世代にその不満が大きかった。彼らは1953年3月，同年度卒業生を中心に新数学人集団（略称SSS）の名を持つ研究組織を結成，全国的なネットワークづくりにも取り組んだ。SSSは「協同研究」（＝研究会やシンポジウム）によって自分たちの研究の切磋琢磨を目指すとともに，大学の数学教室（＝数学科）の「教室運営の民主化」のために集い，活動した。東大でSSSが結成されるにいたるには，以下のような背景があった。

> 東大の数学教室は，1949年当時主任であった彌永昌吉氏，助手福富［節男］氏，学生佐武一郎氏等の努力によって一応教室会議が設立されて，民主的運営の体裁だけは整っていたが，主任が末綱恕一氏に変ると共に有名無実となり，剰え，朝鮮戦争の勃発と共に，岩沢健吉氏，矢野健太郎氏が渡米して返らず［原文ママ］，学生や若い研究者に対する指導は全くおざなりにされていた。
>
> このような状態を不満に思った学生有志十数名が，昨年［＝1952年］遠山啓氏との座談会を契機として数学方法論研究会（仮稱）を作り，毎週一回各人が自分の専門を懇切明確に説明することをやる一方，淡中忠郎氏，吉田耕作氏，福原満州雄氏等を囲んで活発な懇談会をもつこと等を行ってきたものが新数学人集団として新しい学風の創造に発展してきたものである[65]。

いまでは考えられないことだが，当時は留学したまま何年も帰ってこない教官や，留学中に現地の研究機関に職を得たまま連絡もしてこない教官がいた[66]。そうした研究者は優秀な研究者でもあったから，大学院生や学部学生が学習機会を奪われていると感じたのも無理はない。

SSSは，1953年の日本数学会の春の例会時に九州大学の民科準備会，東工大の遠山研究室，都立大民科の代表者，名古屋大学や東京教育大の有志を交えた

---

[64] 同上，5-7 頁。

[65] 『月報』1 巻 1 号 (1953 年 7 月)，3 頁。

[66] 『月報』にはこうした状況にふれた記事が少なからず掲載されている。

懇談会を開き，SSSが全国の連絡事務局となって『月報』を発行し，学会では独自のシンポジウムを開催して「日本数学界に清新な学風を作ろう」との申し合わせが交わされたのである[67]。

6-4. 九大数学教室の戦後

九大でも，事情は似ていた。1947年，九大の理学部数学教室では，戦争末期の教員と学生一体となった疎開時代の経験を基盤として学生代表が参加する教室会議がもたれるようになった[68]。続いて49年には，全国に先駆けて「教室憲章」が起草され教職員全員の会議で承認された。その後，福岡への校舎復帰や教室の民主化に積極的だった助手ら教官の相次ぐ転出の結果，教室会議は形骸化していった。しかし，52年に数学教室の新制三年生一同から破防法反対決議が出されたことをきっかけに，教室会議の復興が始まっている。自重を求めた主任教授の説得に屈せず，教室の全体会議で「破防法に反対する学術会議の決議を支持する」決議をなし，「九大に於ける破防法反対闘争の先駆を切った」のである[69]。京大でも，破防法に反対して3回生全員が座り込んだのをきっかけに教授陣との懇談と教室の改革が進んでいった。京大EOUSという若手数学者のグループができて雑誌の刊行が始まったのもこの年であった[70]。東大でのSSS結成につながる動きが始まったのも，同じ52年だった。

九大数学教室では，53年2月ごろの原子力問題の討議の中で民科再建の気運が学生の間に生まれ，4月に新入生を迎えると民科準備会数学班の主催で研究会が始められた。そうした中で東大SSSとの出会いがあり，全国連絡会の結成へとつながっていったのである。九大での学生たちが問題にしていたのは，講座制からもたらされる「セクト主義」や「教授独裁」の問題，あるいは必修カリキュラムの過重負担などの「単位問題」であった[71]。

当時の九大は，北川敏男とその直弟子である小野山卓爾の存在によって，東大と並ぶ確率・統計論研究の拠点大学であった[72]。1954年秋から「確率統計の会合」が全国連絡会や数学会の全国大会があるごとに開かれるようになり，東大ー九大以外の大学の参加も始まって「確率統計グループ」（PSG）として活動するようになっている。九大からは瀬口常民（1929-74），河野［和正］，池田信行，鷲尾泰俊らが，東大からは上野正，渡辺毅（1931-）らがグループに参加し，研究面および研究環境面に関する活発な交流を行なっていた[73]。

---

67 『月報』1 巻 1 号 (1953 年 7 月)，2-3 頁。

68 ここでの九大の理学部数学教室の戦後の歴史の記述は，「九大数学教室のあゆみ」『月報』1 巻 4 号 (1954 年 2 月)，10-13 頁にもとづいたものである。『月報』1 巻 1 号では，「九大の数学教室は 1946 年，全国に先駆けて教室憲章を作って教室会議を設立し，最も民主的に運営され」との不正確な記述がある（3 頁）。

69 「九大数学教室のあゆみ」『月報』1 巻 4 号 (1954 年 2 月)，12 頁。

70 「京大 EOUS 誌の誕生」『月報』2 巻 1 号 (1954 年 7 月)，10-11 頁。

71 「九大数学教室のあゆみ」『月報』1 巻 4 号 (1954 年 2 月)，13 頁。

72 「第 4 回全国連絡会」『月報』2 巻 3 号 (1954 年 12 月)，2 頁。

73 「確率統計グループの紹介」『月報』3 巻 3 号 (1956 年 2 月)，25-27 頁。PSG は，Probability Statistics Group の略である。

1956年，九大理学部数学科の講師だった小野山卓爾が恩師北川と袂を分ち，助教授として同大工学部の応用理学教室に移動した[74]。小野山は1924年福岡生まれの福岡育ち，旧制の九大を1947年に卒業，その3年後若干26歳で母校理学部の講師に迎えられた。確率論分野における新進気鋭の研究者だった。

九大のベトナム反戦運動の基盤となる十の日デモの会の発足にあたって，65年当時40歳を超えたばかりの数学者小野山卓爾の存在はきわめて重要であった。というのも，十の日デモの発案者，支持者，参加者となる一群の数学者を同僚として九州に呼んだのは小野山だったからである。

小野山は確率論を専門とし，九大を離れたのちには津田塾，慶応を経て，洗足学園魚津短期大学長まで務めた大学人である。しかし，権威におもねることを嫌い，「野心」と「無頼」に裏付けられた「創造性」の重要性を説くような気風をもった人物でもあった[75]。

小野山が工学部の応用理学教室に移動してまもない56年8月，小野山や九大助手の確率論研究者池田信行らが，お茶の水女子大にいた丸山儀四郎（確率過程論）を説得して九大に呼び，工学部応用理学教室がSSSを中心とした若い数学者の全国連絡会に集う確率論研究者の一拠点になっていく基礎が築かれている[76]。

1960年にはSSSの中核メンバーの一人ですでに大阪市大に職を得ていた渡辺毅が助教授として着任した。当時九大では若手の助手らが教授に不満を持っており，渡辺は九大に第二のSSSを作るという目的をもって赴任したという。渡辺は九大でKSIという組織を作った。KSIというのは「九州数学者陰謀会議」の略称であった。人事など教室運営に多大な影響を与える問題でひそかに相談したり工作を図っていたわけだから，「陰謀会議」という呼称は的外れではなかったが，自分たちが行なっていることに対する自己批評の感じられるユーモアある呼称である。KSIについて，その中心人物だった渡辺は次のように語っている。

> 10人くらいの集まりで。所属は応理が半分くらいと，理学部は助手の若手の人ばっかりで。それで九大の数学教室を民主化しようというので。それは一種の，かなり政治的な陰謀でね――誰を呼んでくるとかいうような[77]。

こうして九大の応理は，小野山と渡辺の牽引で，数学教室運営の民主化に積極的な若い優秀な確率論研究者を次々に採用していくことになった。63年には，十の日デモの事務局的役割を担っていくことになる山田俊雄が助手として着

---

[74] 渡辺毅オーラル・ヒストリー，2012 年 9 月 14 日；「故小野山卓爾教授略歴」（小野山卓爾さんを偲ぶ会配布文書，[2011 年]）この「略歴」は渡辺毅氏のご厚意でコピーをいただいたものである。

[75] 小野山卓爾「野心と無頼と―創造性の裏付け」『オペレーションズ・リサーチ　経営の科学』31 巻 9 号，528-29 頁，1986 年。

[76] 渡辺毅オーラル・ヒストリー，2012 年 9 月 14 日；丸山儀四郎「九州からのたより」『月報』5 巻 1 号，48 頁。

[77] 渡辺毅オーラル・ヒストリー，2012 年 9 月 14 日。

任し，翌64年には確率論が専門ではないがやはりベトナム反戦運動にコミットした倉田令二朗が助手として着任している。このころ，ほかに小島順が理学部から応理の助手となり，十時東生が理学部助手になっている。応理の数学系人事は全部，小野山が教授金原誠に話をして決めていたが，金原は小野山のすべての人事案についていつも「いいですよ」と承認していたという[78]。こうして60年代半ばまでに，九大の工学部応用理学教室には自由で開かれた研究および教育環境を尊重する数学者たちが集まるようになっていたのである。

7. 九大十の日デモの会の発足　1965年10月～

7-1. 直接のきっかけ

65年10月10日，その後7年を超えて続くことになる月3回のベトナム反戦定例デモが福岡で始まっているが，九大の工学部応用理学教室教官であった数学者・倉田令二朗は，この定例デモ開始の「直接のきっかけ」はスメイルから送られてきた『ベトナムの日委員会ニューズ』であったと書いている。

> スメール教授は，『アメリカでは，ベトナム反戦運動をドラマティックに大規模に展開し，ショッキングな行動を起こして反戦運動を政治の焦点に浮かび上がらせねばならないと行動している』と言って，軍事基地内での座り込みであるとか，軍港での積み荷妨害であるとかの具体的な行動を，案として述べていた。我々はアメリカの知識人，学生のこの決意に深い感銘を覚えたわけです[79]。

すでにふれたが，このニュースは65年の「夏も終りの頃」に届き[80]，岩波書店発行の『世界』10月号に全文が訳載された。これを機に福岡ではまず，「ショッキングな反戦運動を企画する委員会」なるものができてさまざまな「珍案」が検討されたという[81]。しかし，数千の学生がベトナムへの弾薬の船積地の入口を閉鎖して逮捕されることでベトナム問題を地域社会に知らしめるという，かの地の「ベトナムの日委員会」の提案に匹敵するような劇的で大規模な行動提案は，この時点で福岡において実行に移されることはなかった。最終的に提案されたのは，「ショッキング」なものからは程遠いが，合衆国が戦争を止めるまでは続けるという持久戦的な「定期デモ」であり，それが具体化したのは，夏休みの終る9月末に社会科学系の九大教員たちが話し合いに参加するようになってからのことであった。

---

[78] 渡辺毅オーラル・ヒストリー，2012 年 9 月 14 日。

[79] 倉田令二朗の 1966 年 6 月 11 日の全国縦断日米反戦講演，九州大学での発言記録。鶴見俊輔・小田実・開高健編『反戦の論理』（河出書房，1967 年），218 頁。なお，同書では倉田の名前は「齢二郎」と誤記されている。

[80] 倉田令二朗・山田俊雄「ベトナム戦争に抗議する福岡の科学者」『現代の理論』（1966 年 8 月号），100 頁。

[81] 小野山卓爾「『十の日デモ』の意識」『現代の眼』（1967 年 3 月号），67 頁。

……昨年［1965年］の九月の終わりの頃，我々と文化系の人たちが話していた時に，十日ごとにデモをやってはどうかという案が出た。毎月十日，二十日，三十日と決めてデモをする。毎回同じ人が参加するのではたいへんであるから，最低二十人でもデモをやることにして，同志を百人以上つのり，月一回位の割でデモに出ることにする。･･･そして，昨年の十月十日に，第一回のデモを行なったわけであります[82]。

7-2. 社会党を良くする会

九大工学部所属の数学者と「文化系の人たち」との話し合いがもたれた経緯については，山田俊雄が詳しい，ユーモアあふれる独自の記録を残している。その記録とは，九大闘争後に救援活動の資金カンパを募る目的で知人らに配布された手書きの「Ｐ通信」である。その中で山田は，十の日デモの会発足の母体となった学内の「ヒミツ組織」の誕生について次のように記している。

「この当時社会主義への道を歩んでいた実権派［＝渡辺毅九大助教授・工学部応理］は65年夏，アメリカから帰国するやすぐ，小野山オトウサマ［＝小野山卓爾九大教授・工学部応理］，小島順さん［九大助手・工学部応理］と組み，非ヨヨギ左派の数学者と，非ヨヨギ左派（現実には，社会主義協会派が多い）の社会科学者を結んだ九大内の非ヨヨギ左派の『ヒミツ結社』をつくることを画策，まず島崎センセ［＝嶋崎譲九大助教授・法学部］とインボーし，一，二ヶ月で数学・社会主義協会＋α連合の『ヒミツ組織』をつくり上げ，それにこともあろうに『社会党を良くする会・九大支部』と命名し，『ヒミツ』ということにしたのだった。Ｐ［＝山田俊雄］は『社会党ワヨクナルカイ』などといい加入をためらったが，毅先生にドーカツされ，『トモカク，ベンリラシイカラ，マアエエワ』といって入った」[83]。

つまり，「社会党を良くする会」は法学部の嶋崎譲と，3年間におよぶ米留学から8月に帰国したばかりの工学部の渡辺毅の両助教授ではじめたものだった。社会党員であり社会主義協会にも属していたが反向坂派だった嶋崎と，一時期共産党に入党してはいたものの共産党以上にソ連一辺倒だった社会主義協会を嫌っていた渡辺が，とにかく社会党を応援しようということで作った組織であった。渡辺は小野山を通して嶋崎と親しくなったという[84]。渡辺によれば，当初この会は秘密組織にふさわしく，きちんと会議を開くこともなかったらしい。しかし，山田によれば，公式の社会党支部ということで党費もおさめ，『社会新報』の購読もしていたという。ただし，共産党とは違って，中央や県連からの指導や指令などの介入は一切なかった。そして，この会は，社会主義協会が1967年に向坂派と太田派に分裂し，九大での学園紛争が激化して教官のあいだにも立場の相違が鮮明になってくるあたりまでは九大学内で機能していた

[82] 同上。
[83] 山田俊雄「マル秘　阿Ｐ九大闘争記　Ｐ通信」no. 2 （1969 年 12 月 5 日脱稿），5 頁。
[84] 渡辺毅オーラル・ヒストリー，2012 年 9 月 14 日。

らしい[85]。65年10月10日に始まった十の日デモのアイデアも，この「社会党を良くする会」の人的なつながりを通して現実化していったとみてよさそうである。

これに，4月に安保以来の九大教授団のデモを行なった中心人物たち――青山道夫，都留大治郎，滝沢克己ら――と大学院生十数人が賛同して加わり，十の日デモは始まったのである[86]。ほかにも，良くする会のメンバーでもあった文学部の小林栄三郎教授や，教養部の数学教授であった服部勇もデモの常連だった[87]。

なお，十の日デモの発案者である渡辺毅によれば，当初は「じゅうのひ・デモ」と呼ばれており，「とおのひ・デモ」というのはのちの参加者たちが始めた呼び方だという[88]。

7-3. 渡辺毅，倉田令二朗

渡辺と倉田は旧制一高の同期で，東京大学の理学部数学科に，一学年違いで入学している。新制の東大では渡辺が一学年上であった。東大在学中の1949年から52年のあいだに，二人とも左翼思想の洗礼を受けた。「二人の共通の話題は当時の日本共産党の政治方針だった」[89]という。倉田はすでに日本共産党の一般党員だったようだが，渡辺はマルクス・レーニン主義者ではなく実存主義者で，誘われてはいたが学部生時代には入党せず，シンパにとどまっていた[90]。

ともに1931年生まれの渡辺と倉田は，敗戦時には13歳と14歳で，いわゆる戦後派世代に属する。左翼思想に出会ったのは戦後になってから，ということになる。渡辺は戦後も東大に進学するまではごくありきたりな皇国少年で，非政治的な優等生だった。渡辺が左翼の側に身を置くようになったのは1950年の春，東大教養学部1年次も終わりのころだった。渡辺は次のように振り返っている。

> 50年の9月に空前絶後の教養学部のストライキがあったんです 。これはもう歴史に残る。そのときにはもう左翼でした。（中略）3月に「平和を守る会」というのを作ろうとしたんですね，教養学部で。そしたらその結成の集会を矢内原忠雄学部長が禁止したんですよ。そのへんはどういうあれかはいま分かりませんけども，それで僕はすごく腹が立ってね。それから急速に…。それからちょうど朝鮮戦争が始まったんですね，6月かな。そういうことも関連して，それで教養学部のストライキ，その辺で左翼になった[91]。

---

[85] 山田俊雄オーラル・ヒストリー，2008 年 2 月 27 日。
[86] 『毎日新聞』西部版朝刊 1967 年 12 月 5 日。
[87] 『週刊朝日』1967 年 6 月 9 日，20 頁；『毎日新聞』西部版朝刊 1967 年 12 月 6 日。小林栄三郎は 1908 年生まれ（1985 年没）で，専門はドイツ史だった。
[88] 渡辺毅オーラル・ヒストリー，2012 年 9 月 14 日。
[89] 渡辺毅「奇しき縁」倉田令二朗追悼文集刊行会『破天荒の人　倉田令二朗』(2003 年，倉田令二朗追悼文集刊行会)，259-67 頁。
[90] 渡辺毅オーラル・ヒストリー，2012 年 9 月 14 日。
[91] 同上。

1950年は日本共産党にとって大波乱の年だった。正月のコミンフォルムによる日本共産党指導部批判によって波乱は決定的なものとなった。スターリンから直接指示を受けたとされている，コミンフォルムの機関紙『恒久平和と人民民主主義のために』に掲載された匿名論文「日本の情勢について」が，野坂参三や徳田球一らの指導部の平和革命路線を，帝国主義を支持するものとして批判したのである[92]。これ以降共産党は，この批判を支持した宮本顕治や志賀義雄ら「国際派」と，それに反対した徳田一球や野坂参三らの「所感派」（主流派）との分裂が公然化し，ほとんどが国際派だった東大細胞は50年5月，党中央から解散させられた。しかし，すでに国際派の宮本顕治につらなる少数精鋭の非公然組織「ガー・ペー（G・P）」を構成していた東大国際派の中核的学生活動家は，同じ5月に「アー・ジェー（A・G）［反戦学生同盟］」という大衆的反戦組織を作って活動を展開していくことになる[93]。渡辺が先の引用中で述べている「平和を守る会」自体も雲散霧消したが，東大の反戦運動は組織としてはA・Gというかたちで代表されていったようである。理学部数学科の学生では，渡辺や倉田が慕っていた木下素夫や，銀林浩がG・Pのメンバーだった[94]が，党員ではなかった渡辺はもちろん，入党していた倉田もまたA・Gに参加していたにすぎない。以後東大共産党細胞は，国際派がA・G，主流派が民青として対立し，自治会の主導権争いを繰り広げた[95]。

その後A・Gはいわゆるレッドパージ反対闘争を闘っていくことになる。5月には左翼教官追放を主張したイールズ声明反対の大衆的デモを，9月には東大教養学部の試験ボイコット闘争を成功裡に闘ったのである。渡辺の「9月の空前絶後のストライキ」というのは，この東大教養学部の闘争を指し，それはその後全国的な同盟休校へと発展した。

しかし，その後国際派東大細胞は崩壊へと向かうことになる。二つの出来事が決定的だった。ひとつは，51年2月の国際派東大細胞内における凄惨な「スパイ査問・リンチ事件」である。深い傷跡を関係者に残した。二つめの，とどめを刺した出来事は，同年8月におけるコミンフォルムの所感派の活動方針への全面的支持声明である。このコミンフォルムの変節は，レッドパージを受けて地下に潜行していた徳田ら所感派が，平和革命路線から武装闘争路線へと鞍替えし，1951年2月の秘密裏に開催された第4回全国協議会においてその路線変更を公式決定したことからもたらされたものだった。スターリンはこれ以降，国際派を「分派」と規定し，かつて批判した所感派に逆にお墨付きを与えたのである。同年10月の第5回全国協議会で，共産党は軍事闘争路線を組み込んだ新たな五一年綱領を採択している[96]。コミンフォルムの後ろ盾を失った国際派

---

[92] 小島亮『ハンガリー事件と日本』（中央公論社，1987 年），139-40 頁。

[93] G・P はドイツ語の Geheimnis Partei（秘密党），A・G はフランス語の Anti-Guerre（反戦）の略称。

[94] 安東仁兵衛『戦後日本共産党私記』（文藝春秋，1995 年），93 頁。

[95] 1950 年の東大細胞の動向については，当事者でもあった安東仁兵衛の『戦後日本共産党私記』（文藝春秋，1995 年），第 4 章～第 6 章を参照のこと。

[96] この段落の所感派と国際派の経緯については，小島亮『ハンガリー事件と日本』（中央公論社，1987 年），140-41 頁に拠った。

の活動家たちは多くの者が進退窮まるような状態に置かれることになった。52年夏には国際派は解散となった[97]。

こうした混乱した状況下，渡辺や倉田は以後反戦運動ではなく，自らが属する東大理学部の数学教室や数学者が集う日本数学会での活動に軸足を移していったようにみえる。それは，1952年の秋の研究会から始まり，翌53年に正式に設立された「SSS（新数学人集団）」の活動へと結実していくことになる。

渡辺と倉田は，すでに述べたことだが，SSSの中核的なメンバーとして活躍した。倉田は副団長を名乗り，渡辺は機関紙『月報』の二代目編集長の責務を果たすことになる。東大ではこのころ，倉田や渡辺をはじめ当時の国際的な政治問題に強い関心を持つ若い数学者たちが集い，ソ連および日本共産党の民主化を期待しつつ，フルシチョフのスターリン批判や，ハンガリー事件などについてもおおいに議論していたという[98]。

倉田は四国香川県丸亀の出身で，渡辺とは旧制一高では同級だった。一浪して新制の東大に入学したのは1950年で，その後理学部数学科へと進学した。同級に上野正や斉藤正彦がいたが，倉田はセミナーにあまり出てこなかったという。上野らは心配して下宿を訪ねると，寝ていた倉田は静岡の国鉄ストのオルグに出かけていたと説明した[99]。

倉田も渡辺も数学科にいた先輩で東大共産党細胞のリーダー格の一人でもあった木下素夫[100]を尊敬し慕っていた。東大卒業後も倉田は，東工大院生時代，香川県大手前高校時代，日大時代を木下と共有して交友を深めた。1957年，倉田の父が再編設立した大手前中学・高等学校に倉田と木下は一緒に赴任しているが，これはもちろん倉田が誘ったものであろう。二人にとって，これは生活のためのやむなき選択だったようだが，いずれもこの時期に高松市で生涯の伴侶となる女性に出会っている。

倉田は大手前高校では，教員の労働組合と経営側としての親族としての板ばさみになり，身動きが取れなくなっていった[101]。一高時代の友人渋谷正昭の紹介で東京の日本科学技術研修所電算機センターに就職の話があり，1960年に再上京をはたした。倉田の専門の基礎論の分野では，コンピューターに興味を持

---

[97] 安東仁兵衛『戦後日本共産党私記』（文藝春秋，1995 年），289 頁。

[98] 「年譜」『破天荒の人　倉田令二朗』（2003 年，倉田令二朗追悼文集刊行会），295 頁。

[99] 上野正「倉田令二朗と SSS の思い出」『破天荒の人　倉田令二朗』（2003 年，倉田令二朗追悼文集刊行会），12 頁。

[100] 木下素夫（きのした・もとお）は 1926 年（大正 15 年）の早生まれで，浜松一中から 16 歳で旧制一高に入学した俊才だった。結核療養や一度も出席しなかった教練で不合格になるなどで一高卒業は遅れて 1947 年。新制の東大理学部数学科に入学したのは 1948 年のことだった。入学後すぐに政治運動に献身，49 年の医学部看護養成学科の看護婦 13 名不採用事件で闘争を指導し無期停学の処分を受けた。木下の運動へのかかわりについては，『木下素夫を偲ぶ』（木下素夫追悼文集刊行会，1989 年）所収のさまざまな追悼文および安東仁兵衛『戦後日本共産党私記』（文藝春秋，1995 年）を参照のこと。

[101] 倉田ヒデ子オーラル・ヒストリー，2012 年 10 月 7 日。

ち使い始める人たちが出ていた。仕事を紹介した渋谷の回想によれば，倉田の勤務状態は決して芳しいものではなかったらしい[102]。

九大に赴任した翌年の65年に倉田は，電子計算機とオペレーションズ・リサーチの発展の下での数学者の現代的疎外について語り，その疎外を助長する傾向にある日本数学会と既存の研究体制を批判する文章を残している。自身の体験をふまえた文章であろう。そこでは，「将来数学にたづさわろうとする学生諸君は，それが企業に入ることになろうと研究者として生活することになろうと，学生時代に十分正しい数学観と，社会的視界をやしなっておくこと」を希望する，と述べられていた[103]。倉田とコンピューターの以上のような関係は，その後68年に米軍ファントム戦闘機が九大の建設中の電子計算機センターに墜落したことを考えるとなにか因縁というか運命的なものを感じさせるところがある。

たしかに倉田は，数学者は政治と社会から無縁ではありえないことを，身をもって体験していた数少ない数学者だった。「……1962年秋，日大文理学部数学科で令二朗先生他3名の教員，木下素夫さん，福富節男さん，銀林浩さんが理不尽な理由で解雇されるという奇怪な事件があり，令二朗先生は，心労と怒りのあまり脳梗塞の発作に見舞われ，九大に見えたときは，左半身が不自由であった」[104]という経験の持ち主なのである。4人の若手数学者を免職にしたこの日大事件は，彼らの左翼思想や運動経験を日本大学の経営側が問題視して一掃しようと図った驚くべき思想迫害事件だった[105]。

山田俊雄が回顧した文章から倉田の人柄をうかがっておこう。山田は倉田と初めて会った時からの印象を次のように語っている。

> 一目で令二朗先生が大好きになってしまった。大声でドラ声のすごいおしゃべり，話題は数学基礎論・リーマン予想・数学全般・初期マルクス疎外論・グラムシ哲学・サルトル希少性概念・武谷三段階論・政治は令二朗先生のスターリン主義者時代からイタリア共産党流の構造改革・池田低姿勢帝国主義路線・野球談議・相撲見物・病気（中風に関する大変な蘊蓄）はては雲古・お叱っ子のスカトロ談義，いやはや森羅万象神社仏閣（これは令二朗先生の木下素夫さんから引き継いだ口癖）に及んだ。猛烈なおしゃべりの合間に挟まる譬えようもない可愛い笑顔[106]。

---

[102] 渋谷正昭「『戦後から戦後が終わる頃』の思い出」『破天荒の人　倉田令二朗』（倉田令二朗追悼文集刊行会，2003 年），126 頁。

[103] 倉田令二朗「数学と数学者の現代的状況」九州大学展望編集部『展望』10 号（1965 年），58 頁。

[104] 山田俊雄「阿 P 小伝」http://www.ritsumei.ac.jp/se/~t-yamada/test.html（2012 年 2 月 11 日アクセス）。

[105] このいわゆる「日大事件」については，「特集　日大事件をめぐって」『数学の歩み』11 巻 2･3 号（1965 年），37-50 頁; 清宮誠「日大事件その後」『数学の歩み』12 巻 1 号（1966 年），98-100 頁に詳しい。

[106] 山田俊雄「ウルトラ・グレート大大物 令二朗先生」『破天荒の人　倉田令二朗』（倉田令二朗追悼文集刊行会，2003 年），240 頁。

倉田の追悼文集では，多くの友人知人が，山田のこの令二朗評が誇張でも何でもないことを証言している。

倉田の文化やスポーツへの関心の広さには誰もが驚かされている。なかでも物まねは玄人芸の域に達していたらしい。シャンソン歌手ティノ・ロッシ，俳優で歌手のイヴ・モンタン，パントマイムの神様と呼ばれたマルセル・マルソーから，日本共産党書記長徳田球一までこなし，その唄と所作は「まるで本物がいるかのよう」だったという[107]。イヴ・モンタンのシャンソンをとくに好んで唄ったようだが,「歌の意味や背景, 人物の解説まで付く」のも常であった[108]。歌舞伎にも通じていた倉田は「五人男そろいぶみの場面を，それぞれの役者の声色をまねて，はじめから全部暗唱した」という[109]。勧進帳も頭から終わりまで再現できたらしい[110]。「古今亭志ん生，桂文楽，そして倉田令二朗」と水を向けられると「人もそう言い，わしもそう思う」と返していた[111]。

倉田はスポーツ観戦も好きで，プロ野球や高校野球の選手，大相撲の力士のデータの記憶力には長けていた。また，九州場所の際には佐渡ヶ嶽部屋の面倒をヒデ子夫人とともにみるほどだった。倉田は九大の研究室に表敬訪問に来た親方に, 部屋の力士の15日間の取り口を解説していたという伝説まで残っている[112]。

しかし倉田は，文化的スノバリーとも無縁だった。齋藤正彦とシューベルトの『冬の旅』を注釈付きで完唱し，渡辺毅の痛切なる『水師営の会見』に友情をこめて声を合わせることができた倉田は, 造反学生たちが好んで読んでいた『サンデー』と『マガジン』も欠かさず愛読していた[113]。見栄やジャンルや形式にとらわれて, 人間と世界の真理の表現を見逃してしまうようなことのなかったのが倉田令二朗であった。

7-4. 倉田ヒデ子

しかし，定例デモや市民集会の開催など，十の日デモの会の活動実践において重要だったのは倉田令二朗ではなく,「倉田奥さん」こと倉田ヒデ子だった。ヒデ子が福岡での反戦運動に関わるようになったのは, たしかに連れ合い令二朗を通してであった。九大赴任以前に脳梗塞で倒れて半身に障害が残っていた令二朗は, どこに行くにもヒデ子の運転する車に乗せてもらって出かけること

---

[107] 上野正「倉田令二朗と SSS の思い出」同上，17 頁； 銀林浩「倉田令二朗君の思い出――生まれつきの芸人にして永遠の数学者」, 同上, 93 頁; 宮崎浩「倉田のおもいで」, 同上，203 頁。

[108] 上野正「倉田令二朗と SSS の思い出」同上，17 頁； 齋藤正彦「五十年の交遊」同上，117 頁。

[109] 齋藤正彦「五十年の交遊」同上，118 頁。

[110] 倉田ヒデ子オーラル・ヒストリー，2012 年 10 月 7 日。

[111] 上村義明「となりの倉田さん」,『破天荒の人　倉田令二朗』（倉田令二朗追悼文集刊行会，2003 年），20 頁。

[112]大西慎二「倉田先生に思う」同上，36 頁；山田俊雄「ウルトラ・グレート大大物 令二朗先生」同上，242 頁。

[113] 齋藤正彦「五十年の交遊」同上，117 頁；渡辺毅「奇しき縁」同上，264 頁；江藤俊一「倉田先生との出会い」同上，24 頁；大沢重憲「倉田大先生のいくつかの話」同上，33-34 頁。

が多かった。デモへの参加もそうであった。だが，ヒデ子は介助者あるいは付添人として十の日デモの会の活動に補助者的に参加していたわけではなかった。活動の表に出ることは一度もなかったが，自ら反戦運動に意義と必要性を感じ，深夜のビラ貼りから集会時に使う演壇の横断幕のデザイン・作成など，活動の裏方の先頭に立っていた。

ヒデ子は香川県の観音寺町（現・観音寺市）の出身で，1922年に4人の兄を持つ長女として生まれている。ヒデ子の父は馬の売買を手広く行なう商人であったが，一町八反（5,400坪）もの農地を有する農家でもあった。ヒデ子は，大勢の商売相手が家に立ち寄り，手厚くもてなされて泊まっていくのを見ながら育ったという[114]。

九大時代の倉田夫妻の自宅は九大箱崎キャンパスの隣に位置する貝塚団地という公団住宅で，決して広くはなかった。しかし，毎晩のように友人，知人，同僚，学生らがやってきては遅くまで議論し酒を飲み，そして泊まっていった。酔っぱらった倉田は一人でさっさと勝手に寝てしまうことも多く，そのあとはヒデ子が来訪者の世話をした。相手が学生であっても，朝起きると，コーヒーと朝食が用意されていた。それは，ヒデ子の子ども時代の実家の再現であったのかもしれない。ヒデ子は，やってきた客人の相手をするのを少しも厭わなかった。

ヒデ子は地元の女学校を出たあと，いとこの伝手で大阪の浪速税務署に努めたが，婚期の遅れを心配し，おそらくは戦時下の都会暮らしの不自由も心配していただろう親の懇請に応じて，敗戦前には実家に戻っていた。人の下でルーティンを繰り返す事務仕事にあき足らなさを覚えていたということもあった。

ヒデ子には，兄の一人が戦死しているほかには強烈な戦争体験というものは残っていない。戦争末期の大阪空襲も体験していなければ，実家が農家でもあったことから深刻な食料不足で苦労した記憶もない。戦争の恐怖も物質的欠乏も，ヒデ子はおおむね無縁なままに敗戦を迎えている。

またヒデ子は，戦時下に成人となった女性としてはかなり自由に育てられていたようである。敗戦後，ヒデ子はふたたび大阪に戻るが，今度は女の自活には手に職をつけるのが一番と考え，大丸デパートの美容室に見習い修行として入った。経営者は戦前のアメリカに留学してパーマネント・ウェーブの技術を持っていた薮内龍子だった[115]。ファッション性ある髪のスタイルに対する需要は戦後社会の未来性，平和性の表象だったとみることもできるだろう。そういう形で女性たちは戦後社会への欲求を表現したのだろうし，実業の資質と才のあったヒデ子はそうした戦後女性の欲求の底堅い潮流に目をつけて事業に乗り出しもしたのだろう。すでに20代後半に入っていたヒデ子であったが，親の心配をよそに，結婚して夫の生計に頼って生きていくという発想は少しも持ち合わせていなかった。

3年ほどして技術を身につけると，二人の同僚美容師を引き抜いてヒデ子はさっさと香川に戻り，丸亀の中心街で自らの美容室を開業する。その後，繁盛していた美容室を結核による療養で閉じることになったが，健康を回復すると今度はお好み焼き屋の経営に乗り出し，高松にも新たに日本料理店を開いた。

---

[114] 倉田ヒデ子オーラル・ヒストリー，2012 年 10 月 7 日。

[115] 薮内龍子「パーマネント・ウエーブ」『住宅』21 巻 8 号，1936 年，趣味欄。

新規事業に次々に取り組んだヴァイタリティは，ヒデ子自身が言うように，やはり父親から受け継いだものかもしれない。

ヒデ子は客として来ていた倉田にプロポーズされて上京することになった。ヒデ子は「大いに迷ったが，私にとって，不足を補う勉学があった」と振り返っている。令二朗や令二朗の友人たちがヒデ子にもたらしてくれた世界は，学ぶべきことに満ちた魅力的な世界だったのである。だが，同時にヒデ子は，結果的にそうはならなかったものの，東京には新たに面白い事業を展開するチャンスがあるのではないかという自立した野心も持っていた。ヒデ子はただ令二朗についていったわけではなかったのである。令二朗への追悼文中に，次のように記した部分がある。

> 令二朗氏が健常者であれば，きっと別れていたと思う。上京する意気込みと決断の中で，勉強のこともあるが，何か（仕事）つかむことがあった。しかし，目の前に病人がいる。当然のように，車とともに助っ人になると決めると，彼に
>
> 「私はこれからおじちゃんについて行くから，安心してやりたいことを一杯やって，楽しい人生にしよう」
>
> と告げた[116]。

令二朗はどんなに安心したことだろう。

福岡でのベトナム反戦運動に対しても，ヒデ子は起業家的なセンスをもって関わっていたといってもいいのかもしれない。自ら意義を見出したことには自分自身で誠心誠意取り組んでみないと気が済まないのがヒデ子だった。デモや集会という運動における「事業」の準備を，ヒデ子は人任せにせず，自分の手で率先して行なった。1965年当時ヒデ子はすでに43歳であったが，運動に関わっていた学生たちにまじって裏方をこなして疲れを知らない女性であった。十の日デモに掲げるプラカードなども，自宅に保管し，それをヒデ子がデモのあるたびに車で市役所に運んでいたという。

7-5. 山田俊雄

当時の十の日デモの裏方を引き受けていたもう一人の「大人」が，九大工学部応用理学教室の助手の山田俊雄だった。山田は渡辺毅や倉田令二朗より6歳ほど年少で，1965年には若干28歳であった。日本の敗戦時にはわずか8歳であり，戦前の思想体験はもちろんまったくない世代に属する。

山田は，1937年6月，京都市北白川の薬局店の息子として生まれている。住民には大学教員もいれば，農民も朝鮮人もいるという社会階層の混在していた地域だったという。山田は，先頭に立って政治運動を行なう気質の人間ではなかったが，参加しなければという義務感，参加する以上はちゃんと行動するという倫理意識を強く持っていた。そのような，学生運動および反戦運動への参加をなかば義務にも感じて行なっていたことの要因として，山田は小さいころからの戦争への恐怖があったことをあげている。小学校2年生のとき，生まれ

---

[116] 倉田ヒデ子「倉田と私の出会い」『破天荒の人　倉田令二朗』（倉田令二朗追悼文集刊行会，2003 年），106-107 頁。

故郷の京都で敗戦を迎えた山田は，中学，高校の頃には戦争が再び起こるのではないかという恐怖にしばしばさいなまれていたという。幼少時の戦争の恐怖を呼び起こしたのは，朝鮮戦争や第五福竜丸被爆事件であった[117]。

山田はリーダーとなって政治活動を行なうタイプではなかった。しかし，高校時代には授業料値上げ問題に関わっていたし，京都大学時代には自治会の執行委員にもなり全学学生組織である同学会の再建委員も務めるなどした。渡辺とも倉田とも異なり，自治会活動や学生運動への参加を自らの倫理的な義務と考えて与していたのが山田だった[118]。

山田の専門は確率論であった。京都出身の山田俊雄が63年九大に赴任してきたのは，九大応用理学教室が日本の確率論グループの拠点的存在であり，専門を同じくした年輩の小野山卓爾やらに誘われてのことだった。小野山はおおらかな人格者で酒好き，山田もまた酒が好きだった。64年，そこにもう一人酒好きで議論好きな倉田が加わったわけである。

しかし，九大工学部応用理学教室教授金原誠の存在なしには，九大の数学者たちを取り巻いた自由な空気は保たれなかったであろう。長老格的な教授という地位の点でも，金原自身の人格という点でも，金原の存在は重要だった。

応用理学教室に所属し，あるいは出入りしていた若い世代の者たちは，多少の違和感と距離感を込めつつも敬意ある親しみをもって，金原の思想や行動原理を「金原ヒューマニズム」と呼んでいた 。そして，彼らの誰もが，金原の「育ちの良い少年のような一本気」 の魅力から逃れることはできなかった。

個々人の学問の自由，思想の自由を語義通りの地平で信じ，それを脅かすものに対しては断固抗議したのが金原であった。個人の自由や思想の自由を組織の秩序や運動に従属させたり屈服させたりすることは，金原に言わせれば合理的な思考のできない「頭の悪い者」たちがすることだった。

7-6. 金原ヒューマニズム

金原は1909年生まれ，65年の十の日デモ発足当時は56歳。静岡県浜松の経済的に恵まれた家に育ち，浜松第一中学から名古屋の第八高等学校，そして京都帝国大学理学部に進学している。八高時代の寮の先輩であった山田鉄雄は，「一見して秀才型であり，かつおぼっちゃんであることがわかった」[119]と述懐している。

京大を卒業するとほぼ同時に旅順工科大学予科教授となり，1944年7月に九州帝国大学助教授となるまでの約12年間を大陸ですごしている。金原の戦争体験についてはつまびらかではないが，戦時下の旅順での重苦しい学園生活の中で金原は学生に次のように語っていたという。

---

[117] この段落の記述は，山田俊雄オーラル・ヒストリー，2008 年 2 月 27 日による。また，山田の自伝的背景については，山田俊雄「阿 P 小伝」http://www.ritsumei.ac.jp/se/~t-yamada/test.html（2012 年 2 月 11 日アクセス）に詳しい。

[118] 山田俊雄オーラル・ヒストリー，2008 年 2 月 27 日。

[119] 山田鉄雄「四度の出会い」，金原誠先生記念文集刊行委員会編『金原誠先生記念文集』（1972 年），67 頁。

学問は自分にとっては，生命より大事です。最愛の妻子がたとえ，自分の目前で殺されることがあっても，自分は耐えることが出来ると思います。しかし，もし学問が自分から奪われるとしたら，自分には耐えることは出来ません[120]。

教え子の一人仲井猛敏によれば，「自ら考えることの出来る人は，高く評価できる」というのが金原の口癖でもあったという[121]。学問の自由への至誠は旅順工大時代から一貫していた。

1960年代の九大で金原は，大学管理法反対，ベトナム反戦十の日デモ，工学部応用理学教室の民主化などに取り組み，いわゆる全共闘世代の学生たちにも深い共感を示して発言し行動した。大学闘争以後も，活動で逮捕起訴された大学院生の公判の傍聴にも欠かさず出席し，福岡県立伝習館高校で免職された三教師の闘いには「教育界におけるファシズム復活の証明」だとして癌に倒れるまで支援活動を行なった[122]。

金原は，古今東西の文学や芸術にも造詣が深く，短歌や俳句，絵画の創作から美術評論まで，幅広い教養と趣味を持った大学人だった。金原を知る多くの者が，金原独特の「デカルト精神」，「デカルト的方法に対する固執」[123]に強い印象を受けている。それは，教え子の一人佐藤次彦の言葉を借りれば「論理をつくすことを前提としない妥協」[124]を嫌う精神であり，免職処分を受けた伝習館高校元教諭の茅嶋洋一の言葉で言えば「非常に常識的なことをきっぱりと言う」[125]精神だった。応用理学教室の若い研究者であった山田俊雄は，「いかなる権威にも臆することなく物事を徹底的に疑いぬき，その底にあるどうしても疑うことの出来ぬ事実からのみ出発すること」[126]が金原の方法であったと述べている。

金原と九大学内において長い付き合いのあった農業経済学者都留大治郎は，1971年，金原へのお別れの言葉の中で，おそらくはきわめて的確に，金原の資質と人間的魅力を描いている。

想いおこすと「自治懇」以来の長いつきあいでした。その自治懇にしても「ベトナム反戦の十の日デモ」にしてもいつも顔ぶれのきまった少人数の集まりでした。そしてそういう会合に必ず先生のあの独特の白いもののまじった顔と眼鏡の顔がみえました。そして人が分かろうとわかるまいが私のような俗物はハラハラするようなそしていつも正しい言葉を火のように吐かれました。おかげでまとまるものもまとまらないのが

---

[120] 仲井猛敏「先生をお偲びして」，金原誠先生記念文集刊行委員会編『金原誠先生記念文集』（1972 年），92 頁。仲井は，旅順工大予科生として 1944 年の金原の転任時まで指導を受けていた。
[121] 同上。
[122] 渡辺毅「大学教師の師表」同上，136-37 頁。
[123] 伝習館救援会事務局「金原さんの霊よ安らかなれ」同上，174 頁の茅嶋洋一の発言。
[124] 佐藤次彦「弔辞」同上，60 頁。
[125] 伝習館救援会事務局「金原さんの霊よ安らかなれ」同上，174 頁の茅嶋洋一の発言。
[126] 山田俊雄「金原先生の死を悼む」同上，163 頁。

先生のみえている会合でした。けれどもそれは先生が悪いのではない，世の中には俗物が多くそして先生はいつまでも青年であり，いや子供のような純粋さと清潔さを保ったからでしょう。私は先生のつきあいのなかで会議というものは，別にまとまった結論をえなくても胸のスカッとするレモンスカッシュかなんかを飲んだ気分になればそれでいいのだということを知りました。先生とお話しするたびにはるか後輩の私が精神的には老化し，年をとっておられる筈の先生のエスプリがはるかに若いことをいつも羨ましくおもったものです。どうしてその若いエネルギーで病魔を拒否しなかったのですか，私はそれに抗議したいのです。……（中略）

金原先生，どう考えてもあなたは不思議な人でした。デモのあいさつで，フランス語でパスカルやキュウリー夫人の言葉をいっても誰もわかるわけはありません。だが平気でそれを言えるところが先生の徳で，またなんとなくみんなそれで気持ちとしては納得できたようです[127]。

ここの冒頭でふれられている「自治懇」は，九大のリベラルな教官のネットワークとして機能していたようである。「自治懇」とは大学の自治をめぐる問題に関心を持つ教官でつくられた組織「九州大学自治懇談会」の略称であった。設立年は不明だが，1960年1月に，羽田事件に関連して箱崎キャンパスの法文経建物地下の九学連書記局が捜索を受けたいわゆる九学連事件の問題についても討議されているので，それ以前から懇談会は開催されていたことは確かである。参加者の一人であった文学部教授の小林栄三郎が以下のようにその活動について紹介している。

……これは行動団体ではなく，文字どおり「懇談会」である。事務局は或る期間誰かのまわり持ちで，会場はそのつど各学部・教養部の世話役のまわり持ち当番である。だいたい月一回おこなう。会合のたびごとに，次回のテーマをきめて，誰か報告者を定める。報告者はそのテーマについて調べてきて三〇分か四〇分ほど報告し，あとはいちおう議長をきめて自由に意見を出しあう。結論は強いて出さない。最後に議長がその日に出たいろいろの意見を整理して報告する――という具合におこなわれる。緊急の問題がおこれば臨時に開催する[128]。

「学問の専門家のほかに『大学の自治』の問題の専門家が育ってきていた」と，自治懇を継続してきた意義を強調した小林は，金原をはじめとする工学部の応用理学教室の教官たちが熱心に自治懇に関わっていたとも述べている[129]。おそらくこの自治懇こそが，65年4月末の九大教官による最初のベトナム反戦デモ実施の母体となったのではないかと推測される。

---

[127] 都留大治郎「弔辞」（1971 年 4 月 12 日）同上，41 頁。
[128] 小林栄三郎「専門家の盲点」，小林栄三郎先生思い出文集刊行会編『厳しく　そして温かく』（小林栄三郎先生思い出文集刊行会，1986 年），148 頁（初出は『大学公論』2 号，1967 年 12 月）。
[129] 同上，149 頁。

金原は自らがベトナム戦争に反対する理由として，ベトナム人による民族自決への不当な干渉，「毒ガス，ボール爆弾その他の残虐な武器の無差別な使用，住民に対する残酷無比な拷問」などの人間の否定，基地供与や武器製造などを通しての日本政府によるアメリカ侵略戦争への加担，の三つを挙げていた。「アメリカの政策は私には我慢できない不愉快なこと」であり，それに協力する日本政府に対して金原は「日本人としてやりきれない不愉快を感じ」ていた。こうした憤りを「自分の年齢，身分，能力で可能なもの」としてどう表明するのかを考えたと，金原は言う。「どのように考え，どのように感じても，それを何等かの実践によって発表するのでなければ，実質的に考えたり，感じたりしないのと変わらない」というのが，反戦活動に与する金原の理屈であった。こうして金原は，相互関連がきわめて深い二つの反戦活動に主体的に参加した。ひとつが「ベトナム問題に関する数学者懇談会」による国際的反戦活動の実践であり，もうひとつが福岡市での「十の日デモの会」による定例デモ行動である[130]。

九大工学部の数学者たちが，福岡でのベトナム反戦活動の中心的存在となった経緯は以上のようなものであった。十の日デモ発足時の応用理学教室は，のちに不正確にも「造反教官」と名指されていくような大学人の気風に満たされた空間だったのである。しかし，ほどなく，66年春に小島は早稲田大学に，67年春には小野山が津田塾大学，渡辺が大阪大へそれぞれ転出してしまい，その後応用理学教室の教官でベトナム反戦で積極的に発言したり行動し続けるのは，金原，倉田，山田の3人に限られていった。

7-7. 十の日デモの由来

ところで，曜日とは関係なく十日おきにデモをするというアイデアはいったい誰が，どのような理由で出したのか。山田は「Ｐ通信」で次のように続けている。

> 「『十の日デモ』の発想について，タケシ・ジョー論争［渡辺毅・嶋崎譲論争］があり，いずれも『オレが先にいいだした』と譲らなかったが四年半もたった今［69年12月］，『十の日デモ』は健在だが，担い手のスッカリ変った今，ジョー先生『オレがアレを始めた』とまだ言うかどうか，少し興味のあること」[131]。

渡辺によれば，嶋崎と渡辺がなにか話をしているときに出てきたもので，どちらが先に言い出したかははっきりしないという。十日ごとのデモという発想の由来も不明である。渡辺は「なんでひと月3回，十の日にしたのか，語呂がいいと思ったのかなあ」と思い起こしている[132]。十の日デモは最初は「ジュウノヒ」デモとよばれていたが，「トオノヒ」デモとも呼ばれるようになり，「ジ

---

[130] この段落の引用はすべて，金原誠「なぜベトナム反戦の運動をするか」『若い広場』，1968 年 5 月号，48-49 頁からのものである。

[131] 山田俊雄「マル秘　阿Ｐ九大闘争記　Ｐ通信」no. 2 （1969 年 12 月 5 日脱稿），5 頁。

[132] 渡辺毅オーラル・ヒストリー，2012 年 9 月 14 日。

ユウ（自由）ノヒ」デモとも呼ばれることがあったらしい[133]。十日ごとなら情勢の変化に機敏に応じてアピールを変えていけるという実際的な理由[134]以外にも，こんな連想が遊び心にあふれた九大の数学者たちに受けて，十日ごとにデモをするというスケジュール的には決して楽ではない選択がなされたのかもしれない。

以上のように，福岡では九大の工学部の数学者と社会党系（非社会主義協会系）の文科系教官が中心となり，政党や労組など組織とは実質的には無縁な，定例デモによるベトナム反戦の意思表示が始まった。では，東京ベ平連との関わり，あるいは影響関係はどうだったのだろうか。

7-8. 東京ベ平連との関わり――意識していたが無関係

十の日デモ発足前後の様子を倉田令二朗は次のように述べていた。

> 「工学部の数学者たちは，福岡でも，何とかして新鮮で持続的な活動を始めたいという議論をしょっちゅうやっていたわけです。テレビ利用のティーチ・インとか，ベ平連のニューヨーク・タイムスのベトナム反戦広告運動であるとか，そういうことを注意深く聞いたり見たりしたのも，その頃でした」[135]。

「テレビ利用のティーチ・イン」とは65年8月14日深夜に開始され，東京12チャンネルが生中継放送を途中で中止した「八・一五記念徹夜討論会＜ティーチイン＞戦争と平和を考える」を指すのであろうし，『ニューヨーク・タイムズ』紙への新聞広告については，十の日デモ発足直後の10月15日に開高健が訴えていた。ほかにも，発足時の十の日デモのメンバーは，「京都の青年の日曜日坐り込み運動」などを「私たちにふさわしい運動の形態と考えながら注意深くみつめた」のである[136]。倉田はまた，「十の日デモ＝ベ平連ではなかったが結成にあたって東京のベ平連はかなり意識していたように思う。十の日デモはまさにベ平連方式で運営された」[137]とも述懐している。しかし，東京の動向を注視してはいたものの，東京のベ平連との具体的な連絡のやりとりまではこの段階では行なわれていなかった。あくまで，福岡における定期デモの発足は，福岡独自，九大コミュニティ独自のローカルな実践であった。東京のベ平連関係者としばしば連携がとられるようになるのはのちになってのことである。

7-9. 十の日デモは誰が参加して始まり，どのように行なわれていたか

---

[133] 小野山卓爾「倉田令二朗さんを偲ぶ」『破天荒の人　倉田令二朗』（倉田令二朗追悼文集刊行会，2003 年），55 頁。
[134] 小野山卓爾「『十の日デモ』の意識」『現代の眼』（1967 年 3 月号），67 頁。
[135] 鶴見俊輔・小田実・開高健編『反戦の論理』（河出書房，1967 年），218 頁。
[136] 倉田令二朗・山田俊雄「ベトナム戦争に抗議する福岡の科学者」『現代の理論』（1966 年 8 月号），100 頁。
[137] 倉田令二朗「ベ平連と私」『ベ平連通信ふくおか』24 号，1973 年 5 月 1 日，11 頁。

福岡で定期的なデモ行動がなされるようになったのは同年秋，10月10日（日）からである。第1回目の参加者は35名[138]。デモは毎月三回，十の日の夕刻にほぼ欠かさず行なわれた。市役所の玄関脇に「ベトナム侵略反対　十の日デモ」と染め抜いた幕が張られ，市役所前広場に人が集まったところでデモは始まることになっていた。小野山卓爾は，警察も協力的であった67年初め頃までの平和なデモの様子を次のように伝えている。

> 三々五々，人びとは市役所前の広場に，広場をうめつくそうとしている車のかげに集ってくる。大学にいる研究者，青年労働者，学生，そして，ときには浪人が。いつもは三，四十人くらいだ，もう何度もいっしょにデモをやって顔見知りになっているはずだが，やはり，デモがはじまるまでなんとなく同じ職場，学校の人びとがいくつかのかたまりに分れて，おしゃべりをして出発を待っている。たいていは長老の教授が5時40分ごろ，『さあ，みなさん，出発しましょう』と合図し，幕とプラカードを手に手に，デモにうつる。
>
> 向い側の福岡署から，バラバラと，二，三人の警官がとび出してきて，デモの整理にあたる。東京とはちがうのだ。福岡では，このデモに機動隊を出動させるような，不経済な遊びは，警察だってやりはしないのだ。ごくおだやかな，交通係の警官が車の波からデモを『保護』してくれる[139]。

当初の参加者は，「大部分は市内各大学の研究者であるが，事務系職員，学生，その他の市民の参加」もあった。研究者は文科系，理科系，大体半々，年齢的にもどの世代が格別多いともいえない。熱心に何度も参加される長老教授の数も十人を下らない」[140]。

当初十の日デモで掲げられていたスローガンは，「アメリカのベトナム侵略反対」「政府は戦争協力するな」「日韓条約反対」の三つであったといい，最後の「日韓条約反対」は66年初頭から掲げないことにしたという[141]。日韓条約が65年12月に参議院で承認され，批准されたことを受けてのことであろう。

通常デモ隊は，「ベトナム侵略反対，十の日デモ委員会」[142]と書かれた横断幕を先頭に市役所前広場を出発し，さまざまなプラカードを持った参加者が福岡の繁華街の中心である天神をとおって呉服町まで歩いた。距離にしておよそ2キロメートルである。出発前の市役所前広場で市民に訴える演説をしたり，デモと並行して歩道でビラも配られた[143]。二か月に一度程度は福岡県教職員組

---

[138] 倉田令二朗・山田俊雄「ベトナム戦争に抗議する福岡の科学者」『現代の理論』（1966年8月号），101頁。

[139] 小野山卓爾「『十の日デモ』の意識」『現代の眼』1967年3月号，66頁。

[140] 倉田令二朗・山田俊雄「ベトナム戦争に抗議する福岡の科学者」『現代の理論』（1966年8月号），101頁。

[141] 小野山卓爾「『十の日デモ』の意識」『現代の眼』1967年3月号，67-8頁。

[142] 正確には「ベトナム侵略反対　10の日デモ　10の日デモ委員会」だったようである。その横断幕をかかげて歩くデモ隊の写真が『毎日新聞』西部本社版，1966年12月5日朝刊に掲載されている。

[143] 金原誠「なぜベトナム反戦の運動をするか」（1967年執筆）金原誠先生記念文集刊行委員会編『金原誠先生記念文集』（1972年），41頁。これは，『若い広場』1968年

合の好意で宣伝カーがデモを先導してマイクでの訴えもなされた[144]。呉服町ではなく，アメリカ領事館までデモを行なったこともあった[145]。デモ終了後の「一月か二月に一回行なわれるティチ［原文ママ］・インではベトナム戦争に関連した問題について専門家に話してもらったり，この反戦運動のあり方についての反省会が行なわれたり」[146]した。

7-10. 十の日デモの特色

このデモは「九大十の日デモ委員会」の名前で行なわれ，淡々と続けられた。委員会と名乗ってはいたものの，組織らしい組織はなかった。第1回目から参加していた金原誠は，委員会の特色を以下のように三点にまとめている。

> この会の第一の特色は組織がなく，代表者がなく，事務局があるだけで，現在は九大工学部応用理学教室の山田俊雄さんがこれを担当しています。第二の特色は一人一人の自主的な集まりであることです。微力であろうと何等かの形でアメリカのベトナム政策に抵抗の意志表示をしたいという人の集まりです。もちろん動員などはかけません。第三の特色は他の反戦運動と両立することです。実際組織労働者の役員で参加している人もあります。そういう人は組織としての反戦運動には動員をかけて参加する一方，個人として十の日デモの会に仲間入りしているわけです[147]。

警察へのデモの申請や幕の準備などは，かなりのあいだ，山田俊雄がほぼ一人で行なっていた[148]。最初の8か月間で計20回のデモが持たれた。カレンダー上だと23回になるはずだが，年末年始に反戦デモは市民感情にそぐわないのではないかという議論が出た65年12月30日と66年1月10日の2回はデモを休んでいる[149]。あとの１回分計算が合わないが，21回目のデモとされている1966年6月10日は，単純に22回目の間違いであろう。

この間，3月20日（14回目）には初めて宣伝カーを動員し，アメリカ領事館前で抗議演説を行っている。「デモの前後に国内外の市民組織の運動ニュースが紹介される」ようになったのもこのころからだという[150]。

---

5 月号に掲載された同名論文の草稿にあたるものであり，両者には異なる表現が少なからず見出される。なお，この文集の存在は山田俊雄氏に教えていただいたものである。記して感謝する。

[144] 小野山卓爾「『十の日デモ』の意識」『現代の眼』1967 年 3 月号，66 頁。

[145] 鶴見俊輔・小田実・開高健編『反戦の論理』（河出書房，1967 年），205 頁。

[146] 金原誠「なぜベトナム反戦の運動をするか」（1967 年執筆）金原誠先生記念文集刊行委員会編『金原誠先生記念文集』（1972 年），41 頁。

[147] 同上，41-42 頁。『若い広場』1968 年 5 月号では，第四の特色として「定期的に頻繁に行なわれるということ」（50 頁）が加えられている。

[148] 山田俊雄オーラル・ヒストリー，2008 年 2 月 27 日; 平嶋康昌「倉田さんに『酒を飲むこと』を教えてもらった，という話」倉田令二朗著作選刊行会編『万人の学問をめざして―倉田令二朗の人と思想』（日本評論社，2006 年），374 頁。

[149] 小野山卓爾「『十の日デモ』の意識」『現代の眼』1967 年 3 月号，68 頁。

[150] 倉田令二朗・山田俊雄「ベトナム戦争に抗議する福岡の科学者」『現代の理論』1966

「21回目［実際は22回目］」のデモにむけて，九大十の日デモの会は「『十の日デモ』に参加しよう！」と呼びかけたビラを作成し配布した。以下はその全文である。

一，九大教官有志の提唱によってはじめられたベトナム反戦十の日デモは，昨年10月10日に始まり，その後福岡地区諸大学融資の参加をえて，毎月3回（10日，20日，30日）づつ行われ6月10日をもって21回目を迎えます。参加者は毎回20～70人，のべ650人，少なくとも一度は参加した人，350人

二，この運動はアメリカのベトナム政策とそれに加担する日本政府に抗議する諸個人の意思表示の市民的運動であり，勿論思想信条の相違を問題にするものでは全くありません。組合，学生自治会等の組織的行動の重要性はうたがう余地はありませんが，市民一人一人の自由な抗議の意思表示は我々の絶対的権利であり，抗議運動を全国的なものにするための不可欠の条件だと考えています。

参加者の思想信条の多様性を前提とする運動に反対意見をもつ人達もその考えをあらためて自由な市民として参加するよう呼びかけます。

アメリカと日本の現在の政策に反対する人は誰でも，一人でも多く

10の日に

５時過ぎに

市役所前

に集まり，自由に語り合い，行進するよう，うったえます。

九大十の日デモ委員会[151]

8か月間で「少なくとも一度は」参加したことのある人の数は350人であるから，ほんとうに淡々とした小さな定例デモだったといえよう。すでに述べたように，ときどきティーチ・インが開かれたが，デモとは別個に反戦集会を開くということも，当初はまったくなかったようだ。倉田が直接の契機になったと述べていた合衆国の「ベトナムの日委員会」の非暴力直接行動に比べると，この初期の唯一の運動形態であった定例デモというのはずいぶんおとなしいものである。

しかし，このような10日ごとにデモを行なうことのみに徹した運動スタイルも，徐々に変わり始める。それは，定例デモを始めて8カ月ほどたち，上述の参加呼びかけビラがつくられた66年6月ごろからだった。東京のべ平連との具体的な連携も始まっていた。

8. 小括（2）

本号では，はじめに，67年末までの福岡での既成組織によるベトナム反戦運動の動向を追い，福岡における闘争が，九州北部および沖縄がベトナム戦争の米軍戦略基地地帯となることへの反対というかたちで取り組まれていた点を

年 8 月号，101 頁。

[151] 「『十の日デモ』に参加しよう！」（発行日不明，べ平連受電文書，吉川勇一史料）。

明らかにした。ナイキ・ミサイルの配備，射爆場の存在，博多港での弾薬陸揚げ，小倉の山田弾薬庫の強化，そしてなによりも板付基地の活用強化に対する抗議運動が，福岡の既成組織が取り組んだベトナム反戦運動であった。また，既成組織による反戦運動の中でも，既成組織外の市民や，既成組織に所属しながら自主性のある活動を求める若者世代の意向に応えようとする運動形態の模索が試みられていることにも指摘した。

次に，同時期の福岡の市民によるベトナム反戦運動の動向を検討した。既成組織による，あるいは既成組織を基盤にした反戦運動とは異なる特徴を持つ，「市民」中心のベトナム反戦運動が1960年代半ばの福岡に登場した。それら「市民」は既成組織に所属しないままで，あるいは所属する既成組織を持ちながらも組織の運動とは別に，一個人として自主的に参加することができるベトナム反戦運動の実践に意義を認めて活動を展開しようとした。福岡の場合，そうした運動の場づくりに尽力したのは九州大学の知識人であった。とりわけ重要だったのが九大の数学者と，彼らが属していた学会である日本数学会の動向であった。そうした数学者のベトナム反戦運動への加担は，1965年10月に始まり，その後7年以上にわたって続けられたベトナム反戦デモを担うことになる「十の日デモの会」発足へとつながった。その福岡「十の日デモの会」の発足の経緯と初期の担い手，その特徴について詳しく論じた。

福岡での市民によるベトナム反戦運動について，「十の日デモ」だけを取り上げて論じるのはミスリーディングの誹りを受けるかもしれない。福岡市民といってもさまざまな市民がおり，反戦運動への関わりについても，既成組織のデモへの参加から多様な小グループでの勉強会や意見表明まで，そこは多様であったはずである。しかし，「十の日デモの会」の存在を抜きに福岡のベトナム反戦市民運動を語ることのできないことも，また明らかである。市民による目に見えるかたちでのベトナム反戦運動を定期的・持続的に展開したのは，十の日デモの会以外には見当たらない。そして，その基盤を築いたのは，九大工学部の応用理学教室に属した一群の数学者たちであった。

本稿では，彼らが共通して有していたと思われる，リベラルで開放的かつ遊び心のある気質の重要性に着目し，それをできる限り示そうとした。というのも，それが運動の気分とでもいうものの基底を形作り，セクトも含む多様で幅広い市民が出入りを繰り返すことのできる場を形成していくことになったと思われるからである。十の日デモの運動も含めて福岡におけるベトナム反戦市民運動のあり方は，いくつかの重要な出来事の経緯を経て変貌を遂げていくことになるが，その基底には設立当初からの開放性を良しとする文化が持続していた。戦前戦中派世代の数学者が持っていた戦争責任の自覚，戦後世代の若い数学者の日本数学界民主化への熱情，その両者がともに，ベトナム反戦を公然と訴えていたシュワルツやスメイルといった世界的数学者との交流に後押しされて，とりわけ福岡で集団的に強く発火したのである。

そして，本号の最終節において，1965年10月に始まり，その後7年以上にわたって続けられたベトナム反戦デモを担うことになる「十の日デモの会」発足の経緯と担い手，その特徴について明らかにした。福岡での反戦十の日デモの実践は，東京のベ平連の活動ではなく，カリフォルニア大学バークレー校における反戦活動によって触発されたところから始まっている。社会科学系の教員たちの参加もあったが，中心になったのは数学者たちだった。渡辺毅，倉田令

二朗，山田俊雄らの若い世代が，年長の金原誠や小野山卓爾らの支持を得て始まった。東京のベ平連のことは意識はしていたが，実際に連絡を取り合うというようなことは発足時にはなかった。

3部構成の最後となる次号では，1968年5月に「福岡ベ平連」が結成されるまでの十の日デモを中心とした福岡でのベトナム反戦運動の経緯を論じる。

（以下，次号に続く）

A Study on Anti-Vietnam War Movements in Japan 1965–1967, with special reference to Fukuoka City (2)

Hideo ICHIHASHI

Amongst many anti-Vietnam War movements in Japan, one of the longest sustained is that of Fukuoka city in Kyusyu. The focus of the movement was *Jū-no-hi-demo*' or *Tō-no-hi-demo*, citizen's protest walks in the city centre, organized every 10th day of the month from 1965 to 1973.

However, its characteristics and membership changed substantially in the first half of 1968. The author of this article thus named the first three years before 1968 as *To-no-hi-demo no Jidai* ('the years of the tenth day protest walk'), and wrote a historical essay focusing on the period. This examined the birth and development of the Fukuoka citizens' protest movement against the Vietnam War as well as placing it in the much wider national context of the anti-Vietnam War movement across Japan. This article is the second part of that essay and the last part will appear in the next issue of this journal.

This article firstly traces the anti-Vietnam War activities in Fukuoka coordinated by established organizations such as political parties and trade unions. Those anti-war struggles were struggles against the U.S. military bases existed in Fukuoka and nearby areas, as they were increasingly used as strategic bases for Vietnam War. Kita-Kyusyu region, which includes Fukuoka city, were witnessing the deployment of Nike missiles, establishment of a firing and bombing practice areas, landing of ammunitions at Hakata seaport, reinforcement of Yamada ammunition depot, taking-off and landing practice by jet fighters at Itazuke airport and so on. Left-wing political parties and trade unions opposed these trends. It is noteworthy that those conventional organisations tried to create new forms of anti-war movements which would appeal to those younger generations, who were likely to hate to be organized from above.

In the second section, this article examines the origins of citizen's anti-Vietnam War movements in Fukuoka, which emerged in the middle of the 1960s. The movement aimed to accommodate those citizens who wished to express his/her own voice against the Vietnam War without affiliating to any organisations. Behind the citizen's movement in Fukuoka were intellectuals of Kyusyu University, especially, and remarkably, mathematicians. The article also looks at the activities pursued by the members of the Mathematical Society of Japan; they were engaged quite actively in anti-Vietnam War movement.

Finally, this article followed up the historical process in which the movement actually formed, focusing on their main activity, *Tō-no-hi-demo*. This last section discusses the characteristics of the intellectuals behind the scene, in order to make sense of the movement in Fukuoka.

Key words: anti-war movements, Vietnam War, Fukuoka City, *Tō-no-hi-demo*